

4. 椿井遺跡第3・4次発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は、平成21年度及び同22年度府営基幹農道整備事業山城2期地区に係る埋蔵文化財発掘調査に伴い、京都府農林水産部の依頼を受けて実施したものである。

椿井遺跡は、木津川市山城町椿井に所在する縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。これまで当該事業に伴い過去2回の発掘調査が実施されており、今回の調査は第3・4次調査となる。第1・2次調査では、縄文時代後期の墓と考えられる土坑や弥生時代後期の竪穴式住居跡、土坑などが確認されており、弥生時代後期の高地性集落として注目されている。

調査の結果、第3次調査では弥生時代の土坑、飛鳥時代の溝・建物・柵列のほか中世以降のピットや土坑を、第4次調査では弥生時代の方形周溝墓・土坑・溝、古墳2基、中世の柵列や土坑を検出した。

調査に係る経費は、全額農林水産部が負担した。報告に使用した座標系は、日本測地系の第VI系である。調査にあたっては、京都府教育委員会、木津川市教育委員会、地元自治会をはじめ多くの方々にご指導・ご協力をいただいた。記して、謝意を表します。

各年度の調査体制等は以下のとおりである。本報告は松尾・黒坪が執筆した。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 第3次調査 調査第2課主幹調査第3係長事務取扱 石井清司

同調査員 松尾史子

第4次調査 調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

同調査員 松尾史子

調査場所 第3次調査 木津川市山城町椿井松尾

第4次調査 木津川市山城町椿井御霊後

現地調査期間 第3次調査 平成21年10月28日～平成22年2月18日

第4次調査 平成22年8月10日～11月21日

調査面積 第3次調査 1,200㎡

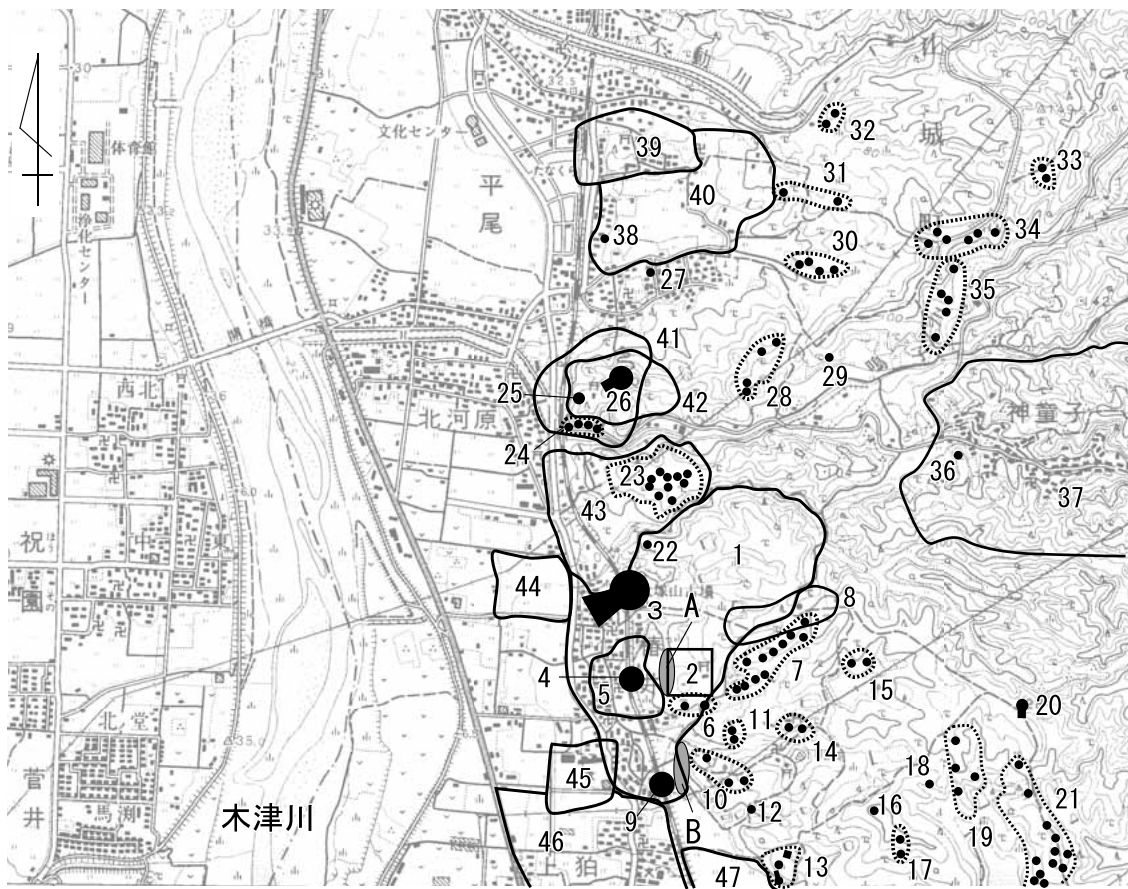
第4次調査 1,050㎡

2. 位置と環境

椿井遺跡は、木津川市山城町の南東部の丘陵および河岸段丘上に立地する。周辺の遺跡を見ても、縄文時代草創期の尖頭器が千両岩遺跡から出土している。同遺跡からは縄文時代早期の押型文土器も出土している。前期には湧出宮遺跡で集落が形成され、後・晩期の土器が堂ノ上遺

跡や椿井大塚山古墳の盛土内から出土している。弥生時代の遺跡には中期の湧出宮遺跡、後期の
上狛西遺跡、綺田柏谷遺跡、蟹満寺境内がある。

古墳時代前期には椿井大塚山古墳、平尾城山古墳、椿井天上山古墳、北河原稲荷山古墳、椿井
御霊山古墳などの大型の前方後円墳が築造されるが、中期には古墳築造がこの地域では見られな
くなる。古墳時代後期には横穴式石室を埋葬施設とする群集墳が造られる。南山城でいち早く横
穴式石室を導入したと考えられている椿井天竺堂古墳をはじめ、上狛千両岩1号墳(TK47)、綺
田山際1号墳・車谷2号墳(MT15)は畿内系横穴式石室導入期の古墳である。松尾古墳群、寒光
坊古墳群、宮城谷古墳群などの群集墳が数多く分布する。同時期の集落については旧山城町内
ではこれまで未確認であったが、上狛北遺跡で古墳時代中期から後期の集落が見つかった。白鳳期
には狛氏により高麗寺が造営され、奈良時代には山城国府や恭仁京が置かれたと考えられている。



A : 第3次調査地 B : 第4次調査地 0 2km

- | | | | | |
|------------|------------|-------------|------------|-----------|
| 1. 椿井遺跡 | 11. 切ヶ敷古墳群 | 21. 蓮池古墳群 | 31. 墓谷古墳群 | 41. 今城跡 |
| 2. 松尾廃寺 | 12. 天敷堂古墳 | 22. 野田尾古墳 | 32. 笛吹古墳群 | 42. 城山遺跡 |
| 3. 椿井大塚山古墳 | 13. 天竺堂古墳群 | 23. 西ヶ峰古墳群 | 33. 鳴子谷古墳群 | 43. 堂ノ上遺跡 |
| 4. 椿井天上山古墳 | 14. 高築山古墳群 | 24. 北谷横穴群 | 34. 相応谷古墳群 | 44. 阪ノ下遺跡 |
| 5. 椿井城跡 | 15. 田護平古墳群 | 25. 稲荷山古墳 | 35. 稲葉古墳群 | 45. 柳田遺跡 |
| 6. 松尾古墳群 | 16. 小杉谷古墳 | 26. 平尾城山古墳 | 36. 心経塚 | 46. 上狛北遺跡 |
| 7. 宮城谷古墳群 | 17. 袋谷古墳群 | 27. 越中谷古墳 | 37. 神童子遺跡 | |
| 8. ムナガイ遺跡 | 18. 金村古墳 | 28. 北原古墳群 | 38. 三所塚古墳 | |
| 9. 御霊山古墳 | 19. 猿谷古墳群 | 29. 萩谷古墳 | 39. 湧出宮遺跡 | |
| 10. 寒光坊古墳群 | 20. 桜谷古墳 | 30. 南萩ノ谷古墳群 | 40. 丹夕遺跡 | |

第1図 調査地及び周辺遺跡位置図(国土地理院 1/25,000 田辺)

中世には山城国一揆の舞台となったことで有名であるが、今城跡、椿井城跡などの山城が築かれている。また、近世まで大里環濠集落として栄えていた。

3. 第3次調査

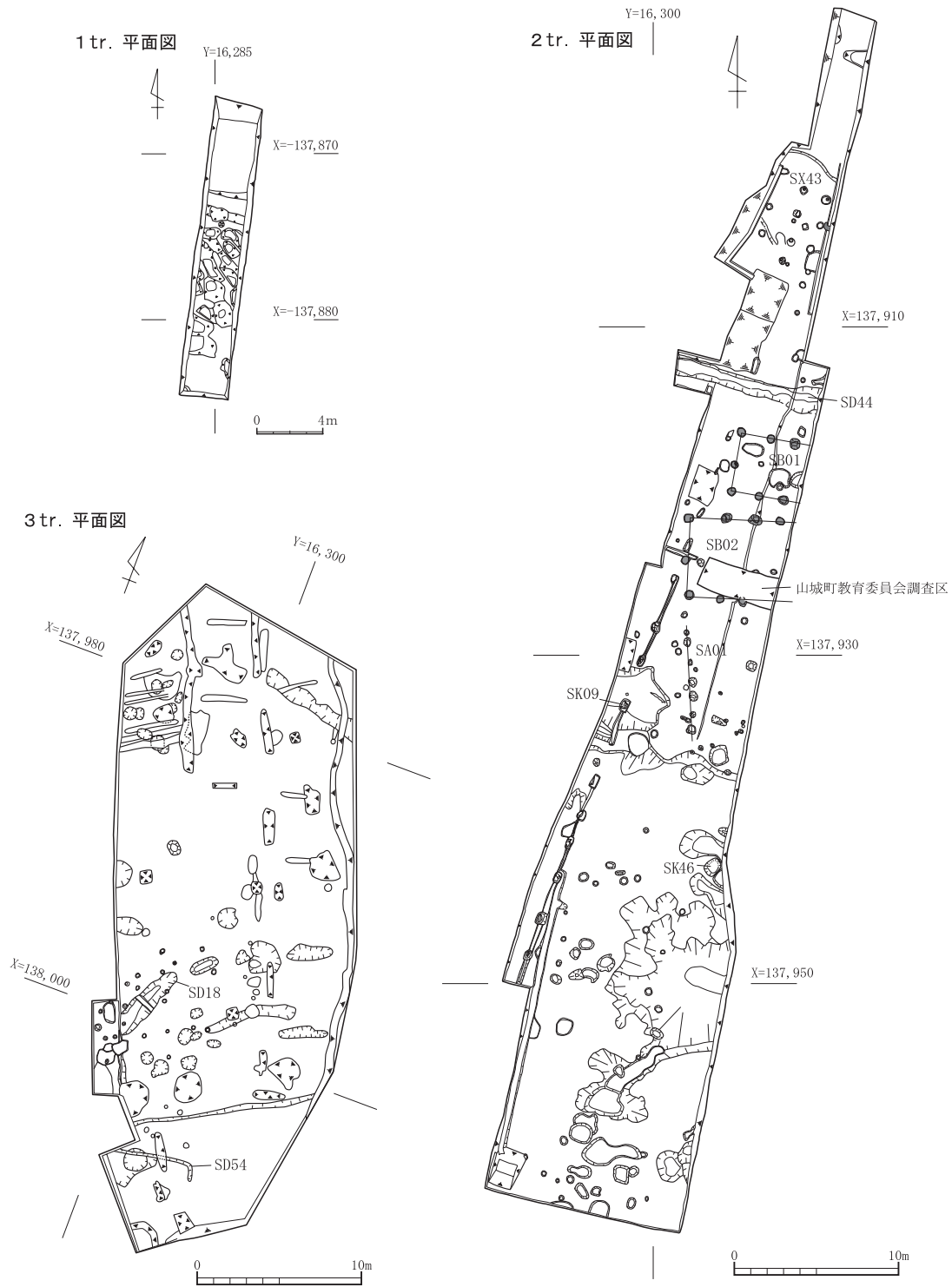
1) はじめに

第3次調査地は椿井遺跡の南西部の丘陵上に位置する。弥生時代後期の竪穴式住居跡などが検出された椿井遺跡第1・2次調査地点の南方約300mの地点にあたる。平野側には椿井天上山古墳、南西の谷には松尾古墳群が所在し、東側には松尾廃寺と松尾神社が隣接する。松尾神社の境内は京都府文化財環境保全地区となっており、平成7年度の表門の解体修理に伴う発掘調査で、土堀が鎌倉時代に遡ることが明らかになった。ほぼ同じ場所にあったと考えられている松尾廃寺は古代の寺院跡で、松尾神社の土堀中から古代(白鳳期～平安時代初期)の瓦が出土している。平成11年度の調査では、鎌倉期の寺域西辺の築地雨落ち溝が確認された。近世には松尾神社の神宮寺である松尾山角之坊伝興寺があったと伝えられている。また、平成13年度の山城町教育委員会の椿井天上山古墳の発掘調査では、弥生時代後期の「V」字の区画溝や土坑が見つかっており、今回の調査地はその区画溝の内側になることから弥生時代の集落跡が見つかることが予想された。

調査にあたっては、道路の路線内に3か所の調査区を設定し、それぞれ北から1～3トレンチとした。なお、2トレンチには平成11年度の山城町教育委員会の調査区(M-103・M-104tr)が含まれ、M-102trで確認された松尾廃寺の西辺溝より西側に位置する。また、3トレンチの南側斜



第2図 第3次調査トレンチ配置図



第3図 第3次調査1～3トレンチ平面図

面には松尾古墳群が分布する。調査の結果、弥生時代の土坑1基、飛鳥時代の溝2条、建物2棟、柵列1条、中世の柱穴や土坑を確認した。

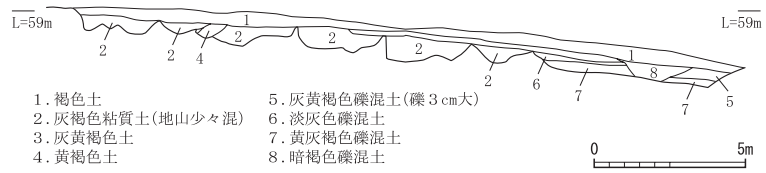
2) 検出遺構

(1) 1 トレンチ 調査地は南から北側の谷に向かって傾斜する地形である。表土である筍栽培に伴う置土を50cmほど除去するとすぐに黄褐色の地山に達した。筍栽培による掘削が全体に及んでおり遺構は皆無であった。出土遺物としては、攪乱から弥生土器と思われる小破片が少量出

土しただけである。

(2) 2トレンチ 調査前は柿の木畑であった。表土直下で遺構面となる黄褐色粘土に達した。トレンチ北部で土坑S X 43や柱穴群、中央部で飛鳥時代の

1tr断面図



第4図 1トレンチ土層図

溝S D44や掘立柱建物跡S B01・02、柵列S A01のほか、中世以降のピットや土坑を確認した。トレンチ南部では近世以降の削平により顕著な遺構は確認されなかった。

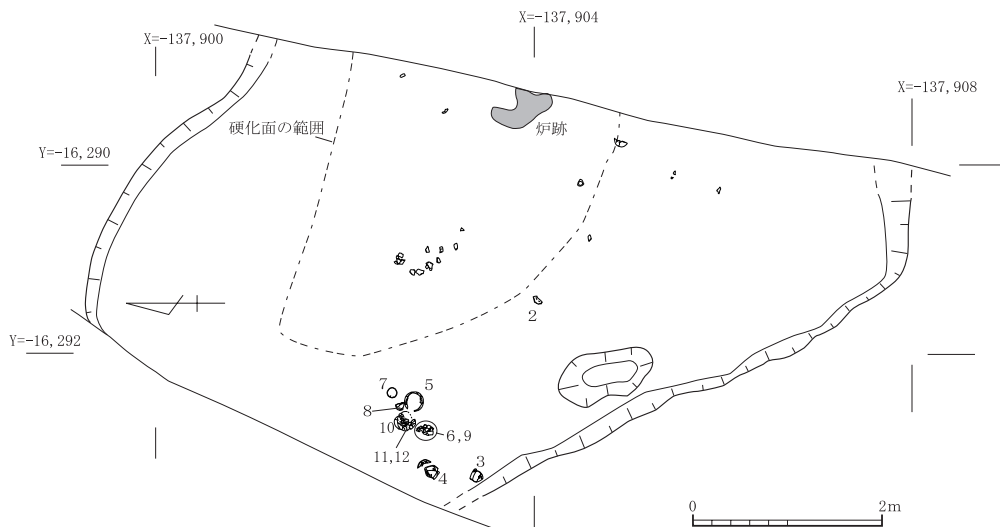
土坑S K46 長軸1m、短軸0.7m、深さ5cmの不整形な土坑である。炭と多量の拳大の円礫により埋まっていた。中世の瓦が出土した。

土坑S K09 長軸4m、短軸3m、深さ10cmの不整形な土坑である。トレンチ中央南西部で検出した。埋土は黄灰色砂質粘土混淡灰褐色土で、鎌倉時代の瓦(第10図33)や土師器などが出土した。

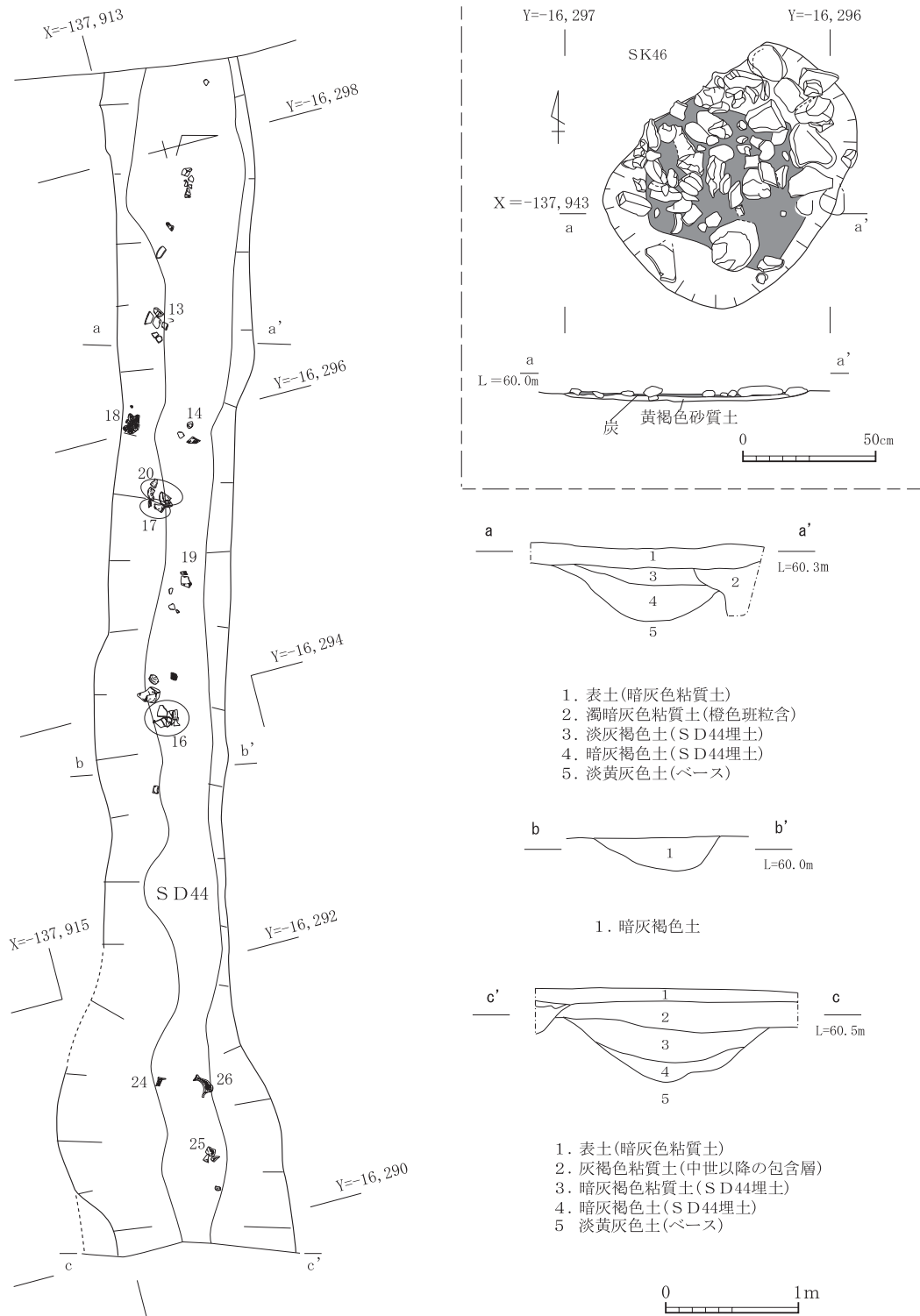
溝S D44 トレンチ北部で検出した東西方向の溝である。幅0.6～1.6m、深さ40cmで、断面は浅い「U」字形である。9m分を検出した。東西とも調査地外に続く。埋土は淡灰褐色土及び暗灰褐色土で、7世紀前半の須恵器や土師器が出土した。須恵器には杯や甕がある。杯には杯Gの身は見られない。土師器は甌や甕など煮炊具が目につく。

掘立柱建物跡S B01(第7図) S D44の南側で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁間2間(3.6m)、桁行2間(4.2m)以上で、東側は調査地外に続く。建物の主軸は西で北に15°傾く。柱間は不揃いである。建物の柱穴は、直径30～50cmの不整円形で、深さは20～40cmと一定でない。出土遺物は時期不明の土師器片のみである。

掘立柱建物跡S B02(第7図) S B01の南で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。梁間2間(4.7m)、桁行3間(6.2m)以上で、建物の東側は調査地外に続く。建物の主軸は西で北に10°傾く。柱間は不揃いである。建物の柱穴は、直径30～50cmの不整円形で、深さは10～60cmと一



第5図 土坑S X 43実測図



第6図 溝SD44、土坑SK46実測図

定でない。出土遺物は時期不明の土師器片のみである。

柵列SA01(第7図) SB02の南西で検出した南北方向の柵列である。主軸は北で西に3°傾く。2間分(5.3m)を確認した。柱間は1.5~2mと不揃いである。出土遺物は弥生土器片および時期不明の土師器片である。

土坑SX43(第5図) 5×7m、深さ約0.2mの長方形の土坑である。調査地北端で検出した。

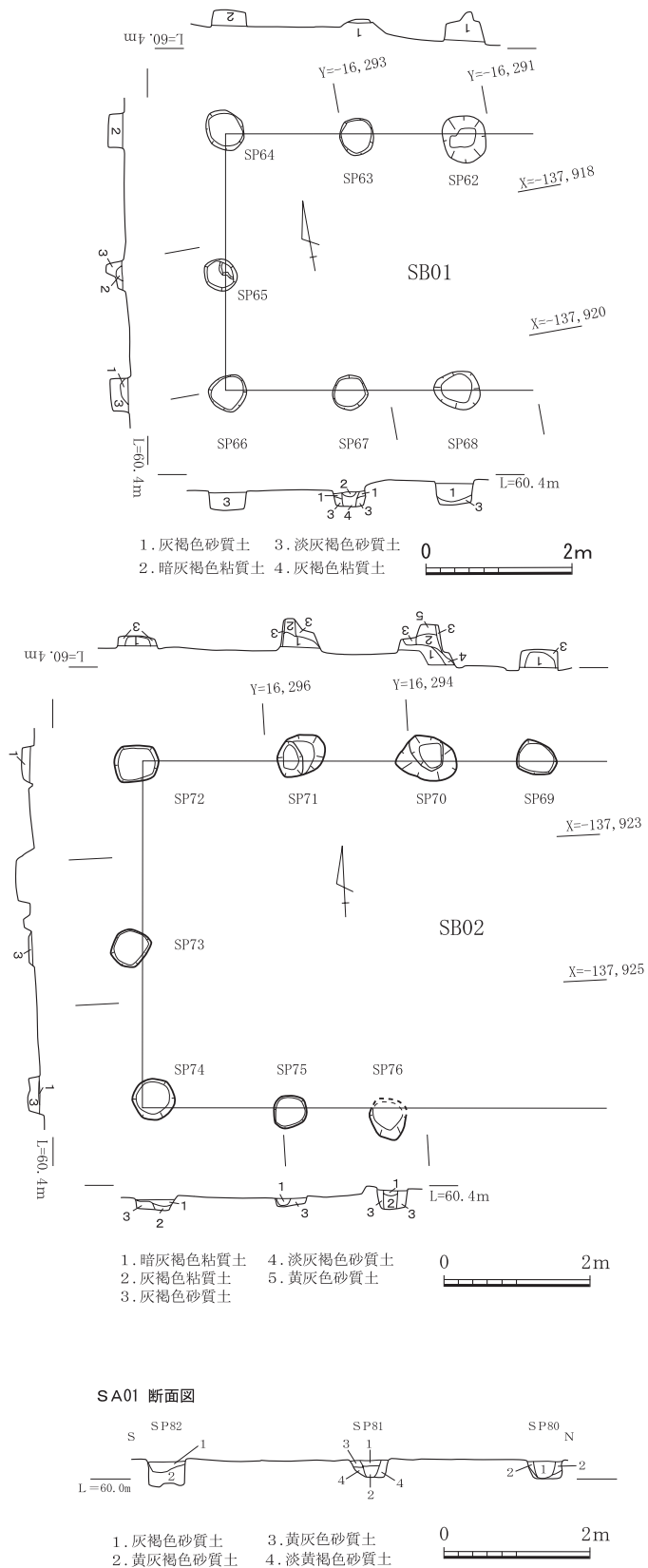
調査地内では北西および南西のコーナーを確認しており、東側は調査地外へ続く。なお、土坑の上層では弥生土器がまとめて出土した。弥生土器の出土したレベルで、部分的ではあるが硬化面もみられ、一部被熱による赤変が認められた。赤変部分は炉跡である可能性が高い。このことから竪穴式住居であった可能性がある。

(3) 3トレンチ(第3図) 表土直下で遺構面となる黄褐色粘土となる。調査前は畑で、トレンチ北半では畑作に伴う溝が多く見られた。トレンチ中央部西側で飛鳥時代の溝SD18を検出したほか中世以降のピットや土坑を確認した。ピット群はほとんどが直径15～20cmの円形で、埋土は淡黄色土である。遺物が出土していないため時期は不明である。

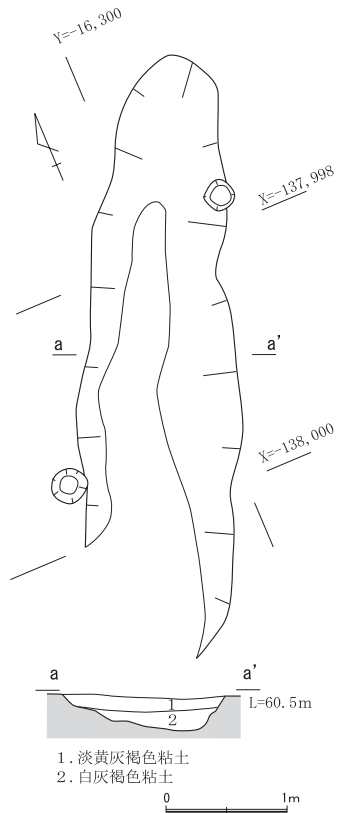
溝SD18(第8図) 幅1.2m、深さ25cm、断面皿状の溝で、5m分を検出した。埋土は上層が淡黄灰褐色粘土で、下層が白灰褐色粘土である。上層から須恵器短頸壺(第10図30)が出土した。時期は飛鳥時代と考えられる。

溝SD54 トレンチ南西隅で検出した幅10cm、深さ10cmの「L」字に曲がる溝である。この溝の南西部分から弥生土器が数点出土していることから竪穴式住居の周壁溝の可能性もある。

3) 出土遺物(第9・10図・図版17～19)



第7図 掘立柱建物跡SB01・02、柵列SA01実測図



第8図 溝S D 18実測図

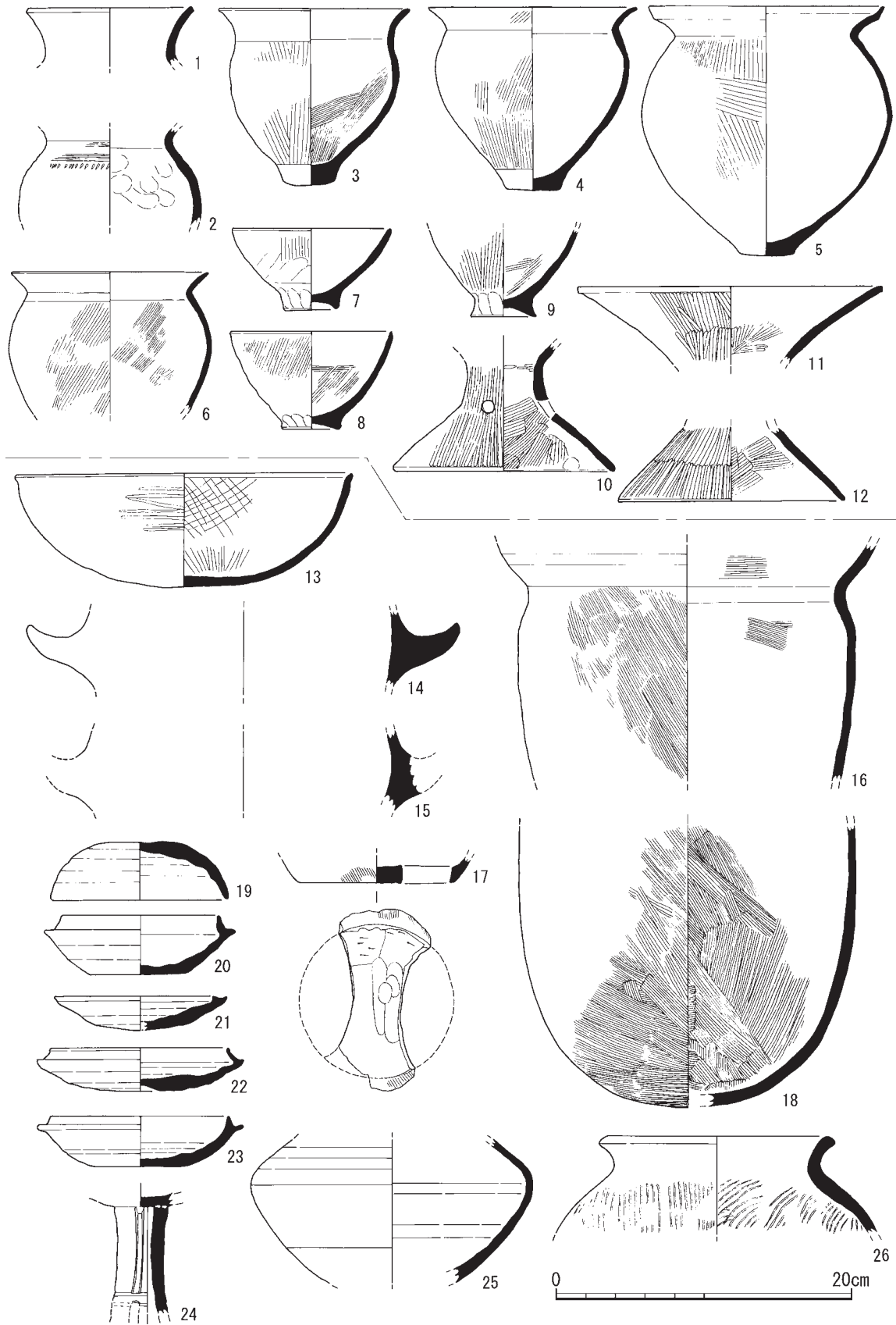
出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器や瓦及び石鏃がある。これらの遺物の時期は、弥生時代・飛鳥時代そして中・近世である。瓦は鎌倉時代と近世のものが中心である。出土した遺物は、整理箱にして総数8箱である。

以下主な出土遺物について報告する。

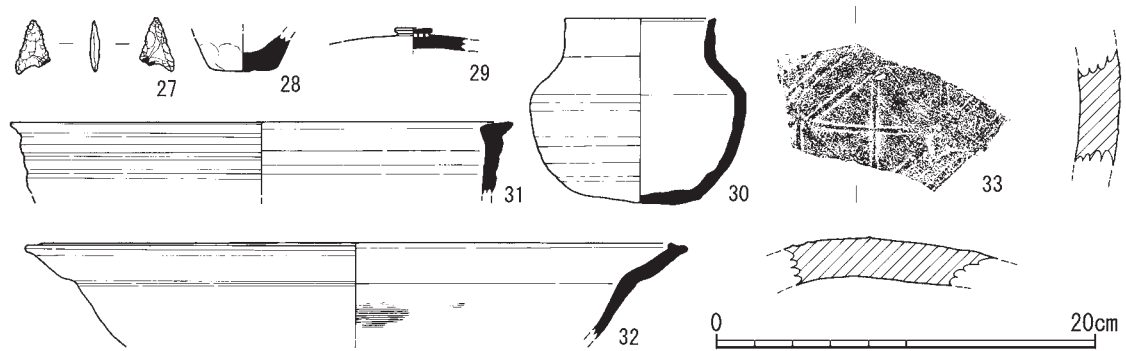
土坑S X 43(第9図1～12) S X 43の上層からは弥生土器がまとめて出土した。1は広口壺の口縁部である。口径11.0cm、残存高4.0cmである。2は近江系の甕または鉢である。口縁部は欠損している。肩部には列点文を施し、頸部の櫛描直線文は4条を数える。3～6は甕である。5が中型で、他は小型である。3は口径13.8cm、器高12.1cmである。口縁部は緩く外方に湾曲し、端部は丸く納まる。内外面ともハケ調整をする。4は口径14.0cm、器高12.5cmである。口縁部は「く」字に屈曲し、端部は丸く納まる。内外面ともハケ調整をする。5は口径15.1cm、器高17.0cmである。口縁部は「く」字に屈曲し、端部は受け口状である。外面はハケ調整をする。内面は摩滅が著しく不明である。6は口径13.3cm、残存高9.6cmである。口縁部は「く」字に屈曲し、

端部は丸く納まる。内外面ともハケ調整をする。7～9は小型鉢である。いずれも直口口縁で、底部を上げ底ふうに仕上げる。甕の分割成形下半を基礎に製作された可能性がある。7は口径10.6cm、器高5.6cm、8は口径10.8cm、器高6.7cmである。10は高杯の脚部である。底径14.6cm、残存高8.7cmである。3方向に透かし孔が施される。外面は丁寧に磨かれ、内面はハケ調整をする。11・12は器台である。11は口径20.6cm、残存高5.3cmで、内外面ともにミガキで調整する。12は底径14.6cm、残存高8.7cmである。外面はミガキ、内面はハケで調整する。両者はほぼ同じ地点で出土していること、胎土や調整が非常に良く似ていることから同一個体と考えられる。これらの土器は第V様式の後半に属すると考えられる。

溝S D 44(第9図13～26) 13～18は土師器である。13は土師器の杯Cである。口径22.6cm、器高7.8cmである。口縁部は底部から湾曲しながら立ち上がり、口縁端部は内側に面をもつ。口縁部外面はミガキ、底部外面は不定方向のケズリを施す。内面には暗文を施す。口縁部は放射状及び格子状の暗文である。飛鳥IもしくはIIに併行するものである。14は甌、15は甕の把手である。16は甕である。口縁部は受け口状に立ち上がる。内外面ともハケで調整する。17は甌の底部である。底径は10.5cmで、穴は2つである。18は長胴甕の下半部である。内外面ともに細かいハケで調整する。19～26は須恵器である。19は杯Hの蓋で、口径11.8cm、器高3.9cmである。20～23は杯Hの身で、深手のもの(20・23)と浅手のもの(21・22)がある。底部は丸みがなく平底に近い。20は口径10.6cm、器高4.0cm、21は口径11.6cm、器高2.3cm、22は口径12.0cm、器高2.9cm、23は口径12.0cm、器高3.4cmである。これらは、口縁部の形態及び法量から7世紀前半

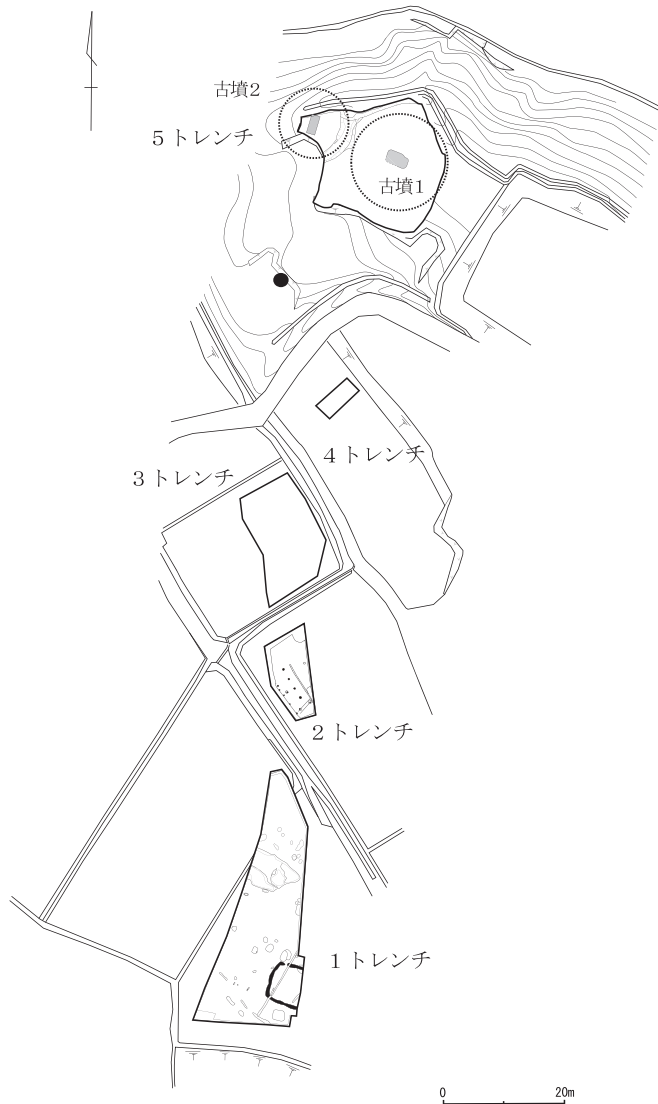


第9図 第3次調査出土遺物実測図(1)



第10図 第3次調査出土遺物実測図(2)

のものと考えられる。21は返りが極端に小さく、杯Gの蓋の可能性はある。24は方形2段透かしをもつ高杯の脚部である。25は短頸壺の体部である。26は甕である。外面には平行タタキ、内面には同心円のタタキが見られる。これらの土器は、土師器杯及び須恵器杯の時期から飛鳥時代前半のものと考えられる。



第11図 第4次調査トレンチ配置図

27は石鏃である。2トレンチの攪乱から出土した。28は弥生土器の甕の底部である。小土坑から出土した。29は須恵器杯の蓋である。2トレンチの攪乱の一つから出土した。30は須恵器短頸壺である。3トレンチのS D18から出土した。口径8.0cm、器高9.8cmで完形品である。肩の張りは弱くなで肩である。31は近世の信楽焼の盤である。包含層から出土した。32は近世の土師器鍋である。2トレンチ南部の窪みより出土した。口径33.2cm、残存高5.05cmである。胎土は精良で外面は乳白色であるが、断面は橙色である。内面は細かいハケで調整する。33は鎌倉時代の瓦である。2トレンチのS K09から出土した。平瓦の破片であろう。厚みは2.2cmと分厚く、外面には格子目(×)のタタキの痕が見られる。

4) 小結

第3次調査では、弥生時代・飛鳥時代そして中・近世の遺構や遺物が見つかった。弥生時代については、比較的

残りの良い土器がまとまって出土したものの、竪穴式住居跡が複数分布するような状況は確認できなかった。後述の飛鳥時代ごろに大部分が削平されたためと考えられる。S B01・02及びS A01からは遺物が出土していないが、S D18・44などと同時期の飛鳥時代の遺構と考えたい。飛鳥時代の溝や建物については、椿井遺跡で同時期の遺構が確認されたのは今回がはじめてである。白鳳期に創建されたとされる松尾廃寺よりも古い遺構であることから、寺の造営と何らかの関係があると考えられる。また、中近世の遺構や遺物については、松尾廃寺や伝興寺に伴うものと考えられる。建物等は確認されず、寺の建物がある区画の外側であった可能性がある。

4. 第4次調査

1) はじめに

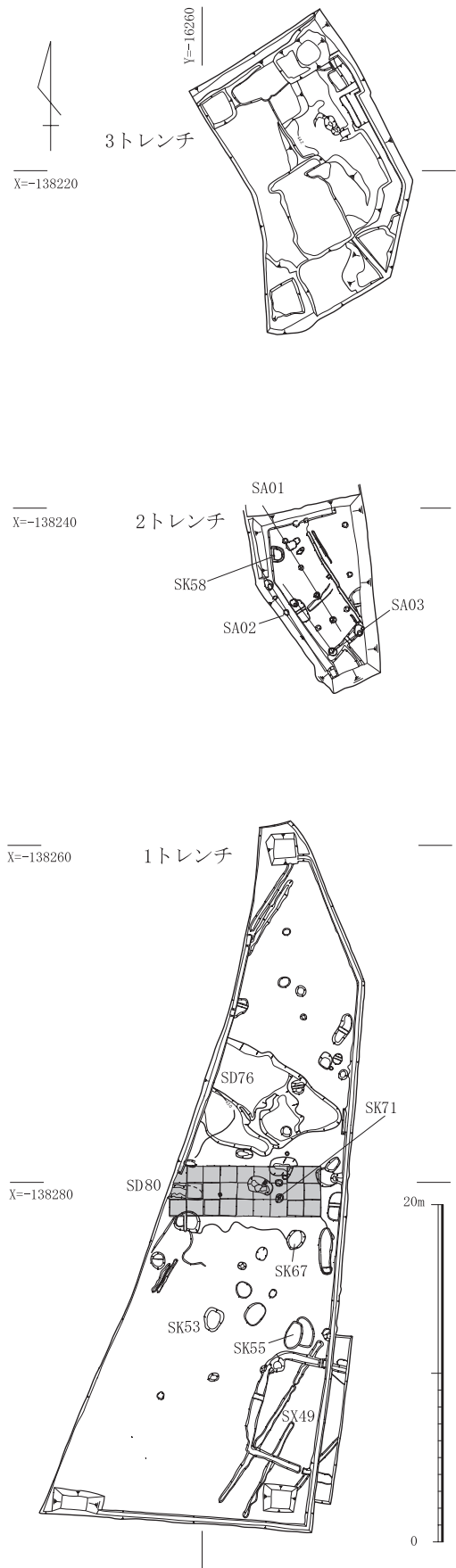
第4次調査地点は、椿井遺跡の南東隅、第3次調査地の南方100m付近に位置する。木津川の低位段丘上に立地しており、平地との標高差は約20mである。地形は北に向かって高くなる。調査対象地の現況は水田や筍畑であった。調査地南端の西側には前期の前方後円墳である御霊山古墳が隣接し、東側の丘陵上には寒光坊古墳群や切ヶ敷古墳群、高築山古墳群などの後期古墳が多く分布している。南東には後期の前方後円墳を含む上狛天竺堂古墳群がある。

今回の調査では、集落の縁辺部の様子や隣接する椿井御霊山古墳の周溝の有無、寒光坊古墳群に連なる丘陵先端部における古墳の有無の確認を目的として調査を実施した。

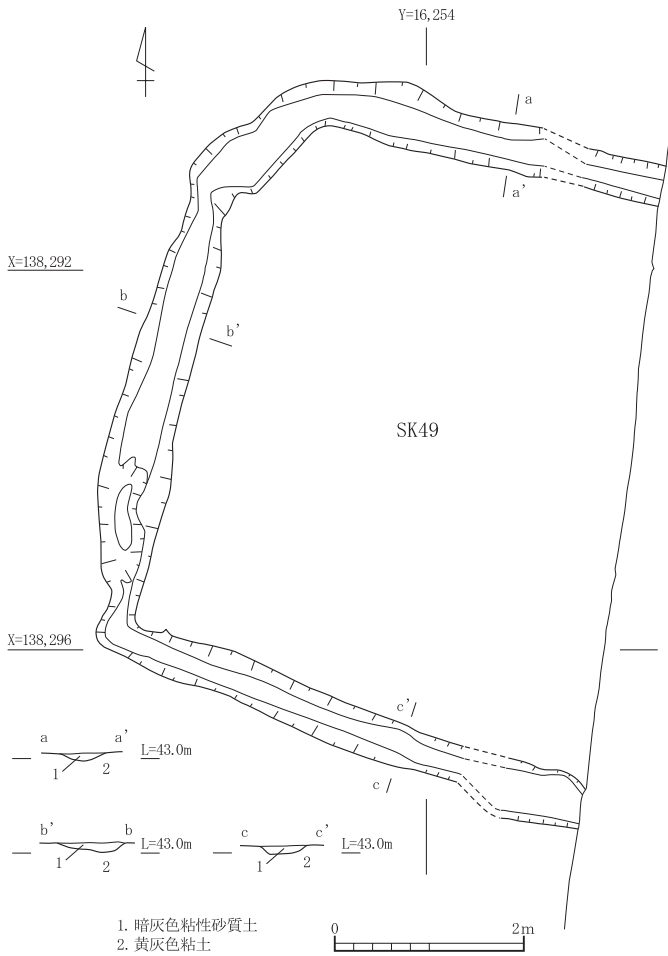
調査にあたっては、事業予定地内に5か所の調査区を設定し、南から順に1～5トレンチとした。調査の結果、弥生時代の方形周溝墓状の遺構、土坑、新発見の古墳2基、中世の柵列と土坑を確認した。

2) 検出遺構

(1) 1トレンチ(第11図・図版第9・10) 御霊山



第12図 1～3トレンチ平面図

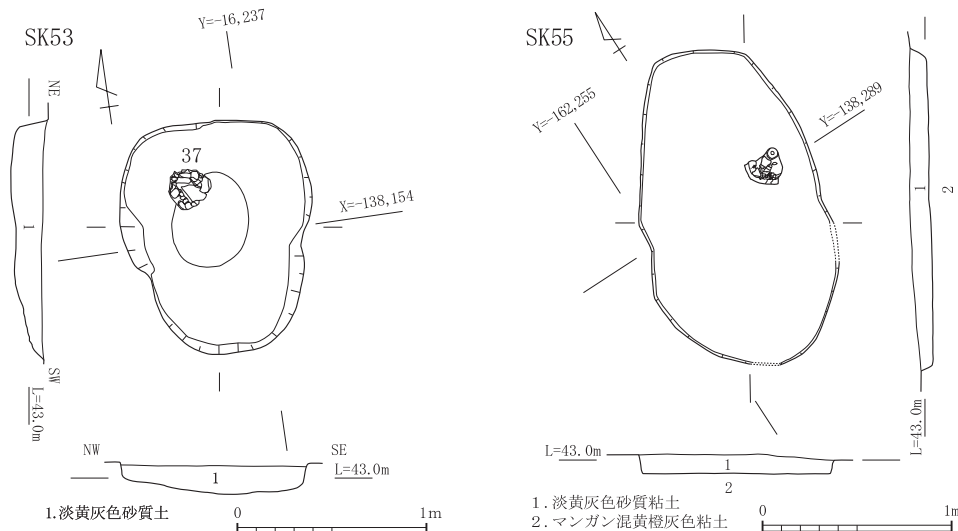


第13図 方形周溝墓状遺構 S X49実測図

古墳の東側の水田に設定したトレンチである。同古墳の周溝の有無及び集落の縁辺部の様子をを確認することを調査の目的とした。表土直下で遺構面である黄褐色粘土及び黄灰色粘土に達した。検出遺構には、弥生時代後期の方形周溝墓や流路・溝・土坑のほか、中世以降の耕作溝などがある。なお、御霊山古墳の周溝と考えられる溝は検出されなかった。また、トレンチ中央部は周辺より若干窪んでおり、灰白色砂質土が浅く堆積していた。この灰白色砂質土より旧石器時代のナイフ型石器(第18図1)が出土したため、3×9mの範囲で1mグリッドを設定して(第12図網掛け部分)石器の調査を行った。その結果上層5～10cmの黄白色砂質土から縄文時代の石器が総数18点出土した。それより下位からは

遺物は出土しなかった。

方形周溝墓状遺構 S X49 1辺6m、幅0.4～0.8m、深さ0.1mの「コ」字状に巡る溝である。トレンチ南東部で検出した。主軸は北から15°東に傾く。埋土は、暗灰色粘性砂質土である。埋土から弥生土器片がわずかに出土したこと、溝の内側にピット等が見られないことなどから方形



第14図 土坑 S K53・55実測図

周溝墓の可能性が考えられる。

土坑 S K 53 長軸1.2m、短軸0.7～1 m、深さ0.2 mの楕円形土坑である。トレンチ中央部南寄りで検出した。埋土は淡黄灰色砂質土で、弥生土器の甕(第17図37)が出土した。

土坑 S K 55 長軸1.6m、短軸1 m、深さ0.1mの楕円形土坑である。埋土は淡黄灰色砂質粘土で、弥生土器の甕が出土したが、図化できなかった。

土坑 S K 67 長軸1.3m、短軸1 m、深さ0.1mの楕円形土坑である。埋土は淡黄灰色砂質粘土で、弥生土器の甕(第17図36)が出土した。

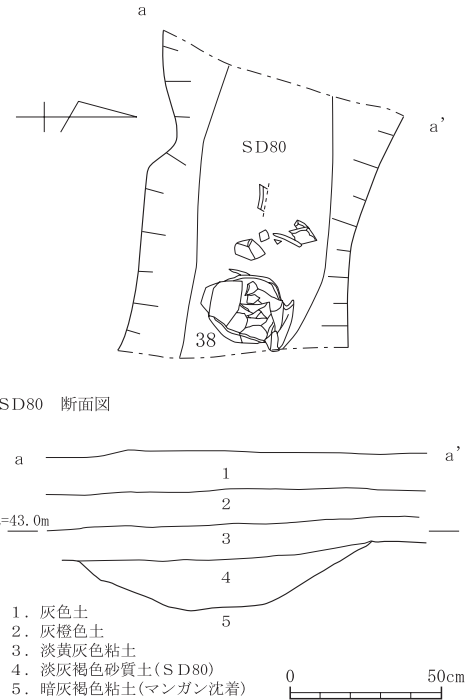
土坑 S K 71 長軸1.6m、短軸1 m、深さ0.1mの楕円形土坑である。埋土は淡黄灰色砂質粘土で、弥生土器の甕(第17図34)が出土した。

流路 S R 76 長さ8 m、最大幅6m、深さ0.1～0.5 mの流路である。トレンチ中央北よりで検出した。流路の底は、東から西に向かって傾斜する。埋土は灰褐色砂質土及び黄灰色砂質土で、弥生土器のほか縄文時代の石鏃や剥片が出土した。弥生土器は遺存状態は良くなかった。

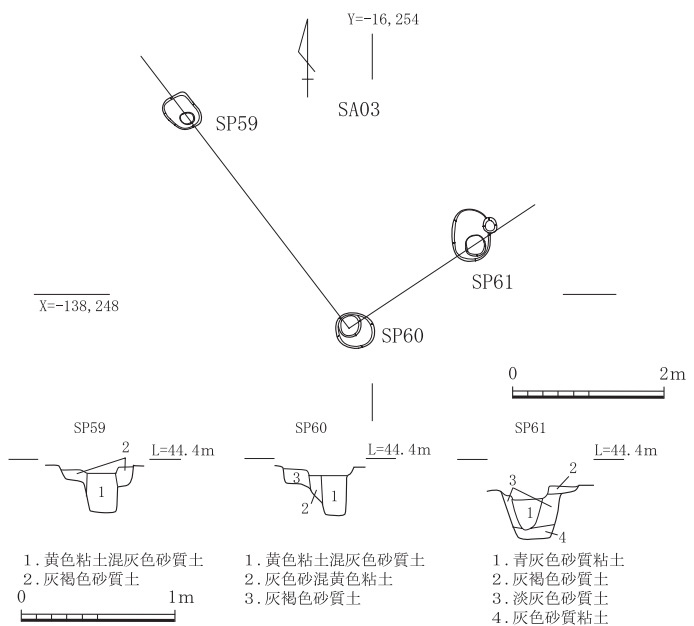
溝 S D 80 幅0.7m、深さ0.15～0.2mの東西方向の溝で、1 m分を検出した。埋土は暗灰褐色砂質土で、ほぼ完形の弥生時代後期の甕(第17図38)が1点横位で出土した。

(2) 2 トレンチ(第12図・図版第11) 1 トレンチの北側の1段高い水田に設定したトレンチである。表土下0.5mまで暗灰色粘質土、灰色砂混黄橙色砂質土、橙色砂質土の順に堆積しており、その下の明黄橙色砂質土上面で、上層遺構である室町時代以降の耕作溝を検出した。その下層には灰褐色系の砂質土が堆積しており、表土下1.2mで地山である黄褐色粘質土に達する。下層遺構である中世前期の遺構は地山面で検出した。検出遺構は中世の柵列3条と土坑や溝である。

柵列 S A 01 トレンチ中央で検出した柵列である。主軸は北から32°西に傾く。3間分(5.4m)を検出した。柱穴は直径0.25mの円形で、深さは0.4 mである。柱間は1.8m等間である。



第15図 溝 S D 80実測図



第16図 柵列 S A 03実測図

柵列S A02 トレンチ西端で検出した柵列である。主軸は北から33°西に傾く。3間分(5.4m)を検出した。柱穴は直径0.2mの円形で、深さは0.2mである。柱間は1.8m等間である。

柵列S A03 トレンチ南部で検出した「L」字に曲がる柵列である。主軸は北から38°西に傾く。東西1間分(2m)、南北1間分(3.4m)を検出した。柱穴は直径40cm前後の円形ないし隅丸方形で、深さは0.4m前後である。柱間は不揃いである。

土坑S K58 トレンチ西北壁際で検出した土坑である。検出長0.4m、検出幅0.7mで深さは0.2mである。埋土から土師器の羽釜(第17図45)が出土した。

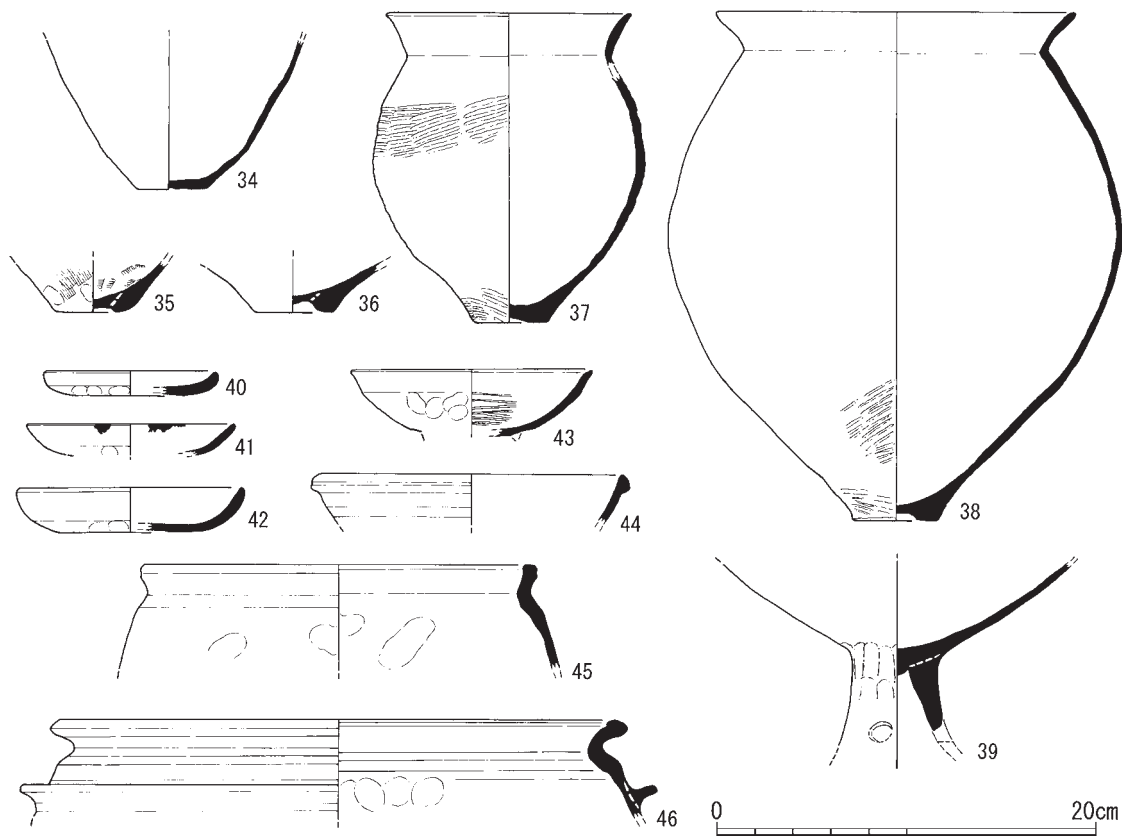
(3) 3トレンチ 2トレンチの北西に隣接する水田に設定したトレンチである。地表下で地山である黄褐色粘土層に達した。近世以降の土取り穴以外に顕著な遺構は検出されなかった。土取り穴からは中世の土師器や瓦器椀、近世陶磁器が出土した。

(4) 4トレンチ 3トレンチの北東側の1段高い平場に設定したトレンチである。表土下2mまで掘削したが、安定した遺構面はなく、顕著な遺構・遺物は確認されなかった。

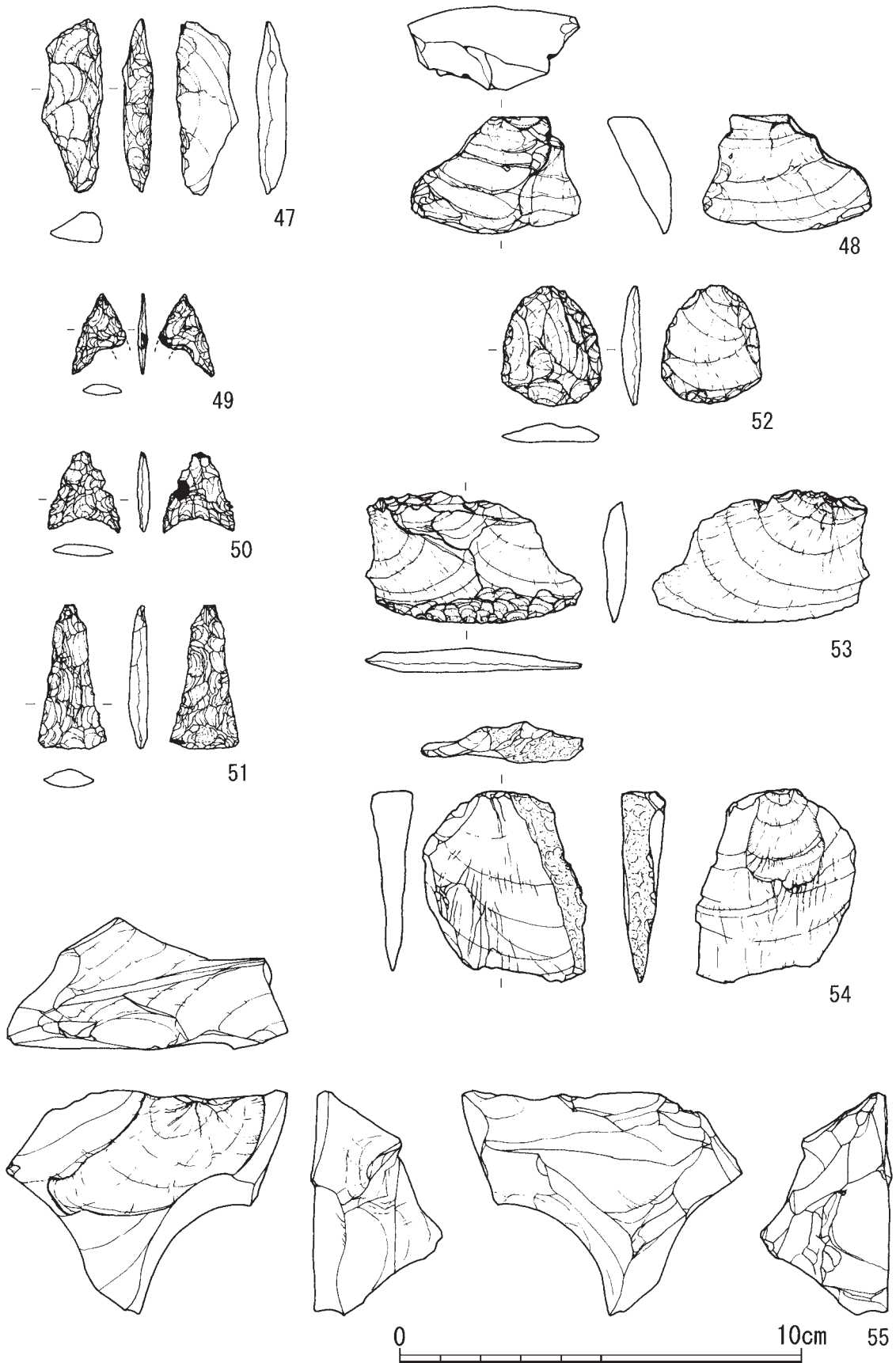
3) 出土遺物(1～3トレンチ)(第17・18図、図版第19・22)

出土遺物には弥生土器、古墳時代の須恵器、中世の土師器、瓦器、陶磁器、近世陶磁器などがある。出土した遺物は、整理箱にして総数6箱である。

34～38は弥生土器である。34～36は甕の底部である。34はS K71から出土した。摩滅がひどく、調整は不明である。35はS R76から出土した。内外面共にハケで調整されており、底部外面



第17図 第4次調査出土遺物実測図(1) 1～3トレンチ：土器



第18図 第4次調査出土遺物実測図(2) 1トレンチ：石器

はわずかに窪む。36はS K67から出土した。摩滅がひどく、調整は不明である。底部外面は大きく窪む。37はS K53で出土した小型の甕である。口径12.8cm、器高16.4cmである。外面は肩部から底部までタタキによる調整の痕跡が残る。38はS D80で出土した甕である。口径19.0cm、器高27.0cmである。内外面とも摩滅がひどく底部にタタキの痕跡がわずかに認められる。39は高杯である。トレンチ中央部の包含層から出土した。脚部と杯部は粘土円盤を充填して接合する。脚部には3方向の透かしが施される。摩滅がひどく調整は不明である。

40～42は土師器皿である。40は3トレンチの土取り穴より出土した。口径9.0cm、器高1.3cmである。13世紀ごろのものである。41・42は2トレンチの排水溝掘削時に出土した。41は口縁部が外上方に開く。薄手で胎土は白っぽい。口径11.0cm、器高1.6cmである。灯明痕が2か所認められる。42は口縁部が内湾する。口径11.8cm、器高2.4cmである。43は大和型瓦器椀である。3トレンチの土取り穴から出土した。口径12.7cm、残存高3.5cmで、高台は剝離している。見込みには螺旋状暗文が施される。外面には指圧痕が見られるのみである。13世紀後半のものである。44は白磁椀である。横田・森田分類のIV類椀の口縁部で、端部は玉縁状を呈する。12世紀のものである。2トレンチの壁面整形時に出土した。口径16.0cm、残存高2.7cmである。45は土師器羽釜である。2トレンチのS K58から出土した。口径20.6cm、残存高5.6cmである。胎土は精良で淡黄褐色を呈する。大和I型羽釜の古手のもので、15世紀の所産である。46は土師器羽釜である。口径29.4cm、残存高5.3cmである。2トレンチ西側排水溝掘削時に出土した。(松尾史子)

石器は少量ながら、後期旧石器時代のナイフ形石器をはじめ、縄文時代の石鏃、削器がある。石材はすべてサヌカイトで二上山産とみられる。剝片や石核の出土もみられ、若干の石器製作が行われていた形跡がある。なお、旧石器時代のナイフ形石器は南山城地域で断片的ながら出土が知られている。八幡市美濃山丘陵の金右衛門垣内遺跡、西ノ口遺跡、城陽市芝ヶ原遺跡など、立地上の共通性が認められる。平野部を見渡せる段丘上や低い台地状の丘陵など、沖積面よりひときわ高く、等高線の幅がばらけるように広がる丘陵頂部はこうした旧石器資料の存在に注意が必要である。

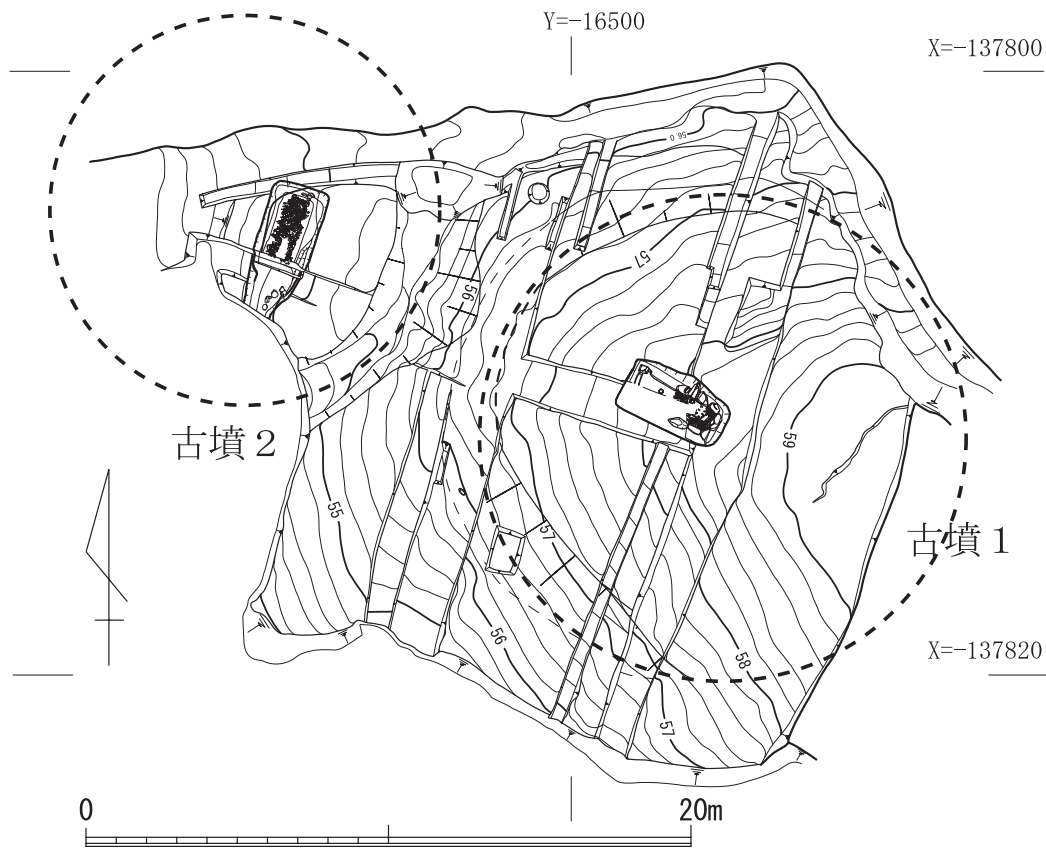
47はナイフ形石器である。1トレンチ中央東側から出土した。長さ4.35cm、幅0.9cm、厚さ0.75cm、重さ4.3gを測る。腹面側の長辺中間部を加撃して得られた横長剝片を素材に、2側縁に入念なブランディング加工を施している。背面は長辺に直交する数面のネガ面となっている。先端部は尖らず、鋭利に薄くなった部分を未加工のまま残し、そこを刃部としている。48は厚みのある横長剝片である。1トレンチから出土。長さ3cm、幅4.25cm、厚さ0.85cm、重さ13.1gである。加工や形状の特徴からではなく、他の縄文時代の石器と比較して風化度が著しく進んでいる点から後期旧石器時代とした。

49から55は縄文時代の石器類、剝片、石核である。いずれも1トレンチ中央部の灰白色砂質土及び黄白色砂質土から出土した。49は基部に深いえぐりをもつ凹基式石鏃である。長さ2cm、幅1.35cm、厚さ0.25cm、重さ0.1gである。基部片側は欠損しているが、先端、基部とも非常に鋭利に尖り、表裏の調整剝離は細かく入念である。50も凹基式石鏃である。長さ2cm、幅

1.8cm、厚さ0.3cm、重さ0.7gを測る。49と比較して幅で基部のえぐりは浅い。先端は欠損するが、基部の両端部は鋭利に仕上げられている。表裏の剝離は非常に丁寧である。51は、基部が平らな平基式石鏃である。長さ3.6cm、幅1.7cm、厚さ0.45cm、重さ2.1g。側縁および基部の細かく丁寧な調整剝離と比較し、先端部の加工は鋭利さを欠いている。基部を機能部とする小型の削器とみることもできる。52は片面の周縁部から中央部全体を丁寧に調整・整形した石器である。長さ3cm、幅2.5cm、厚さ0.45cm、重さ3.8gを測る。石鏃の未成品か削器と考えられる。53は、幅広の横長剝片を素材とする削器である。長さ3.3cm、幅5.4cm、厚さ0.6cm、重さ10.4gである。下端の長辺に細かな調整によるスクレーピングエッジが形成されている。54は側縁部に自然の礫表を残す幅広剝片である。長さ4.8cm、幅4cm、厚さ1cm、重さ14.2gを測る。55は厚みのある剝片素材の石核である。幅7cm、高さ5.6cm、厚さ3.3cm、重さ78.3gを測る。上面の側縁部を調整して打面とし、正面のポジティブ面で横長剝片を剝離している。削器などの素材を得たものといえる。(黒坪一樹)

4) 5 トレンチ (第19図・図版第12)

松尾神社の谷を挟んで南側の丘陵先端に設定した調査区で、標高54～59mである。新たに古墳2基を確認した。調査地は、埋蔵文化財包蔵地に含まれていないが、同丘陵の頂部に寒光坊古墳群が分布していることから古墳の有無を確認することを目的として調査を実施した。調査地は、筍栽培等により地形が大きく改変されており、古墳状隆起等は認められなかった。調査にあたっては、まず、丘陵の尾根筋に沿って幅2mの試掘トレンチを「キ」字状に設定して掘削した。そ



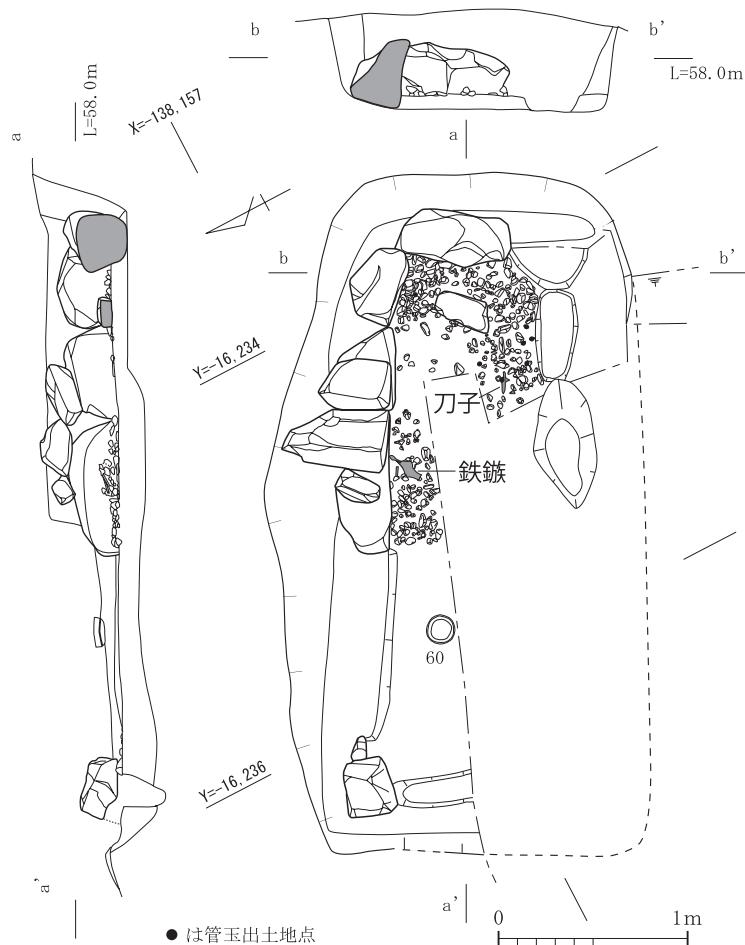
第19図 5 トレンチ平面図

の結果、古墳の埋葬施設(古墳1の石室)と溝状落ち(古墳2の周溝)が検出されたため、京都府山城北土木事務所と協議の上、面的な調査を実施することとなった。なお、古墳の名称については、木津川市教育委員会で検討中である。5トレンチの基本層序は、地表から0.5～0.6mまで表土及び近世以降の筍栽培に伴う置土である灰黄色土が堆積しており、その直下で古墳の埋葬施設や周溝を確認した。

(1)古墳1(第20図・図版第12～14) 墳丘は後世の削平によりほとんど失われており、わずかな地形の変化から直径16mの円墳と考えられる。埴輪や葺石は出土していない。

①埋葬施設 埋葬施設は1基で、北西に入口を設ける竪穴系横口式石室である。主軸は西から17°北に傾く。玄室は幅0.8m、長さ2.7mで、床面には親指大の礫が敷かれている。石材は花崗岩の切石で、付近で採れるものである。石材はほとんど抜き取られており、基底部の奥壁と右側壁の一部が残存していた。また、奥壁の手前に長さ30×15cmの方形の石が1点出土した。礫床の直上で平らな面を上にして出土していることから棺台や枕石の可能性が考えられる。

石室の床面からは、刀子1点、鉄鏃5点以上と碧玉製の管玉が8点出土した。刀子は奥壁付近の左側壁寄り出土した。鉄鏃は、右側壁の第2石の脇で出土した。床面から若干浮いていること、向きにばらつきがあることから原位置は保っていないと考えられる。管玉は、奥壁付近で散乱して出土した。また、石室床面の少し上で須恵器杯蓋(第21図60)1点が内面を上にして出土した。



●は管玉出土地点

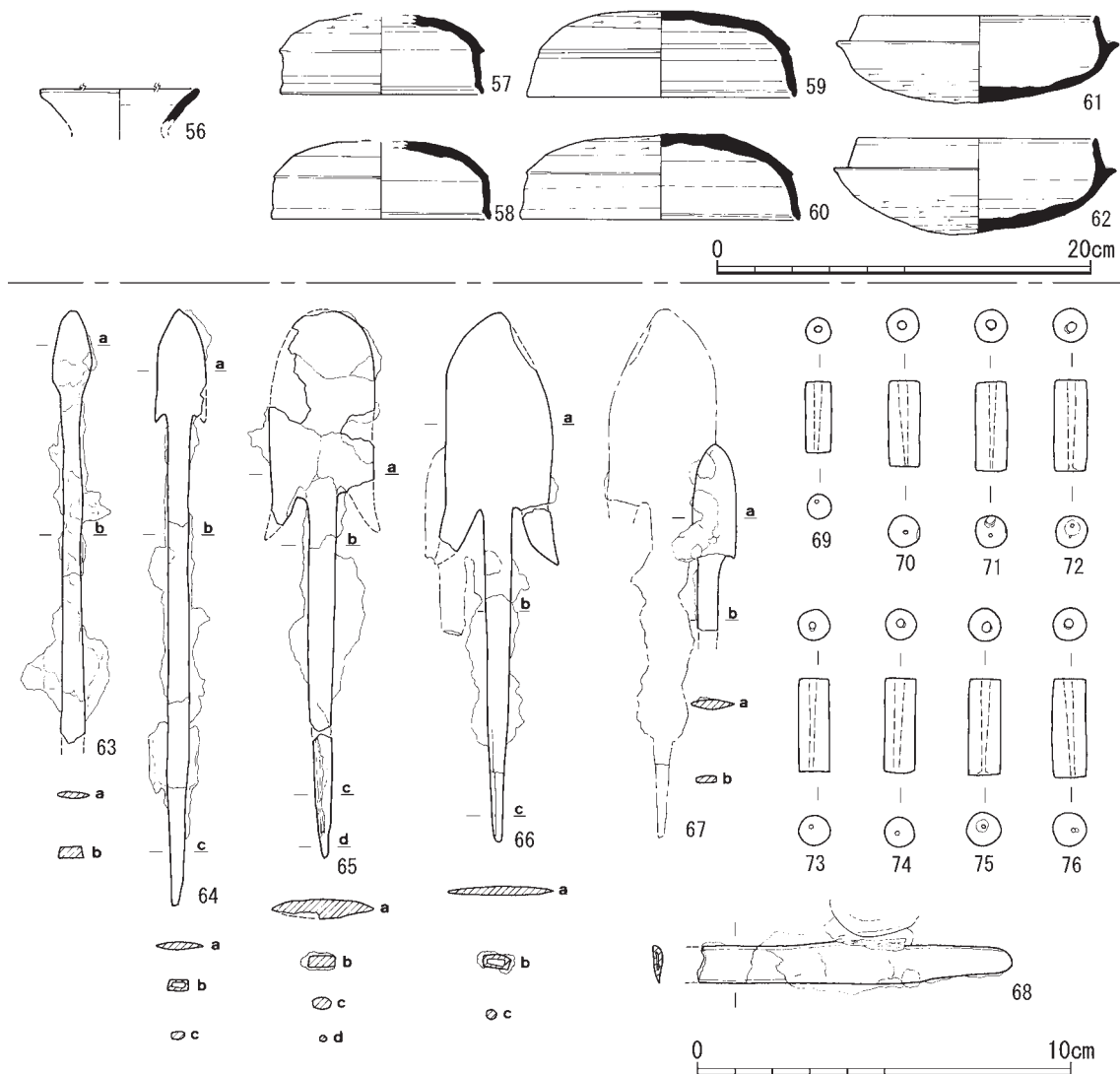
第20図 古墳1石室実測図

た。その他石室の埋土から須恵器の杯身が1点と土師器甕の口縁部片が出土した。石材の抜き取り痕からも土師器の甕(第21図56・図版第22a))が出土している。

②出土遺物(第21図・図版第20)

56は土師器甕の口縁部である。石室の埋土から出土した。57～62は須恵器である。58と60は石室から、他は墳丘から出土した。57～60は杯蓋である。57は口径10.8cm、器高4.25cm、58は口径10.6cm、器高4.2cmである。いずれも色調は濃灰色で、端部の段が明瞭である。57は口縁部と体部との境の段が明瞭で古い様相を持つ。TK47型式と

併行か。59は口径14.3cm、器高4.6cm、60は口径14.8cm、器高4.65cmと大型である。口縁部はやや外側に開き、口縁端部の処理や体部との境の陵が甘くなっている。MT15～TK10型式と併行するものである。61・62は杯身である。61は口径12.6cm、器高4.7cm、62は口径12.8cm、器高5.2cmである。いずれも口縁端部の段が甘くなっており、底部内面には同心円のタタキ痕が見られる。MT15型式と併行するものである。63～67は鉄鏃である。63・64・67は尖根系の鏃で64はほぼ完形である。63は刃部長2.1cm、刃部最大幅1.1cm、残存長10.4cm、64は刃部長3.0cm、刃部最大幅1.3cm、長さ16.0cm、67は刃部長3.0cm、刃部最大幅1.2cm、残存長5.0cmである。65・66は平根系の鏃で、ほぼ完形である。65は刃部残存長5.8cm、刃部最大幅2.8cm、長さ14.7cmである。66は刃部長6.8cm、刃部最大幅2.9cm、長さ14.2cmである。68は刀子である。身幅1.0cm、残存長6.0cm、茎部長2.4cm、茎部幅0.7～0.8cmである。69～76は碧玉製管玉である。直径0.7～0.95cm、長さ1.9～2.65cmの太いもので、大きく3つのサイズに分けられるようである。穴は片面穿孔で、穿孔の入口の径は2mm、出口の径は1mmである。72や75には出口側に穿孔時の剝離が見られる。これらの遺物の時期は、6世紀前半と考えられる。



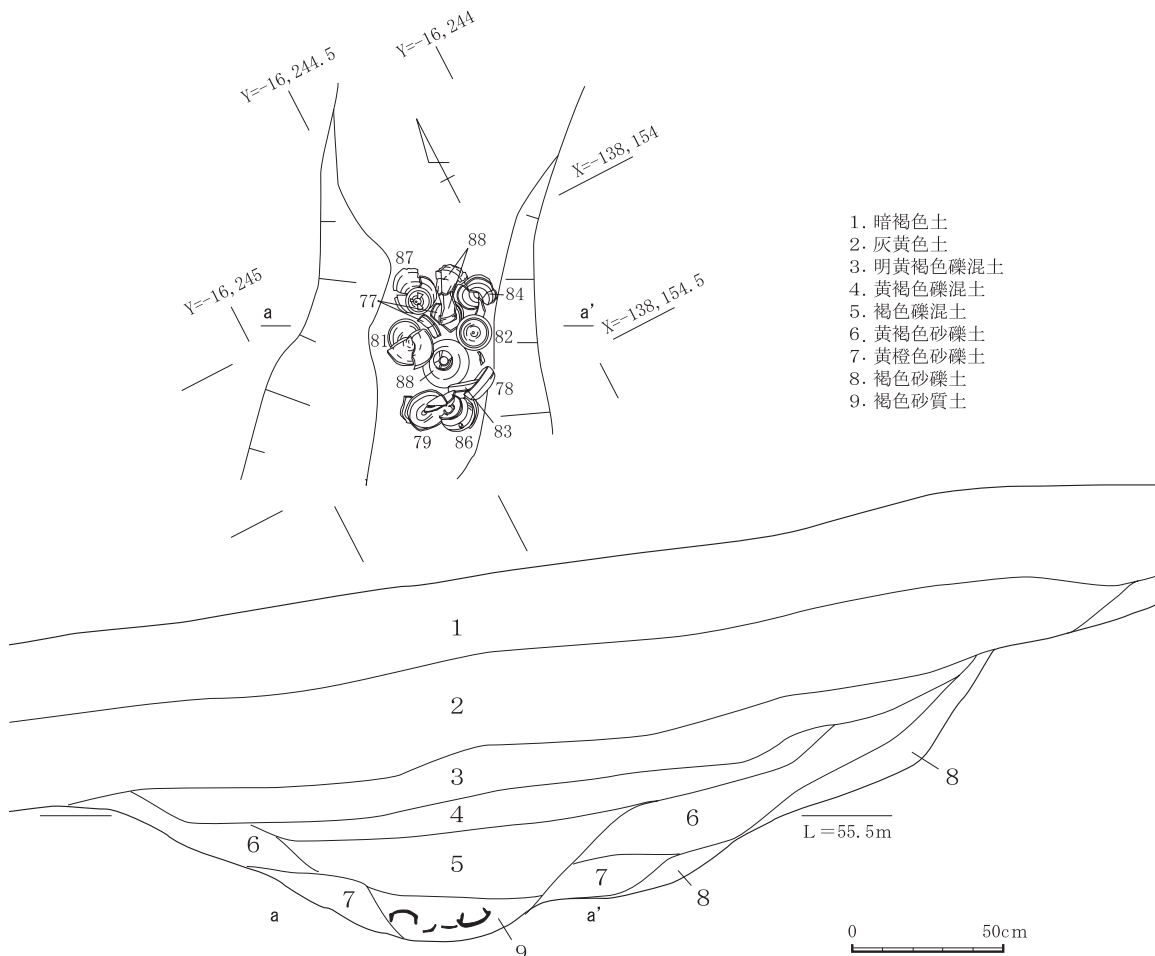
第21図 第4次調査出土遺物実測図(3) 古墳1

(2)古墳2(第22・23図・図版12・15・16) 墳丘は削平により多くが失われているが、周溝の一部が残っており、直径13mの円墳に復元できる。周溝は幅2m、深さ0.6mである。溝底中央付近で須恵器がまとまって出土した。埴輪や葺石は出土していない。

①埋葬施設 埋葬施設は1基で、南西に開口する横穴式石室である。主軸は北から20°東に傾く。玄室は幅0.8m、長さ2.2m分を検出した。床面には子供の拳大の礫の隙間を埋めるように親指大の礫が敷かれている。墓壙および礫床の規模から古墳1の石室とほぼ同規模に復元できる。石材はすべて抜き取られており、構造は不明である。開口部付近に基底石と思われる石材が数点並ぶが詳細は不明である。石室床面からの出土遺物はなく、埋土から須恵器の甕片が1点出土したのみである。また、奥壁近くの床面で骨片がわずかに出土した。

②出土遺物(第24図・図版第21・22)

77～88は須恵器で、すべて周溝から出土した。77～81は杯蓋である。77は口径10.9cm、器高4.35cm、78は口径11.7cm、器高4.4cm、79は口径11.9cm、器高4.1cm、80は口径12.4cm、器高4.15cmである。口縁部は直線的で、口縁部と体部の境の陵や口縁端部の段は明瞭である。81は口径14.1cm、器高4.1cmと他よりも一回り大きい。口縁部は直線的で、体部との境の陵や端部の段は明瞭である。82～85は杯身である。82は口径9.7cm、器高4.7cm、83は口径10.1cm、器高4.65cm、84は口径10.2cm、器高4.7cmである。82・83は口縁端部の段が明瞭であるが、84には段

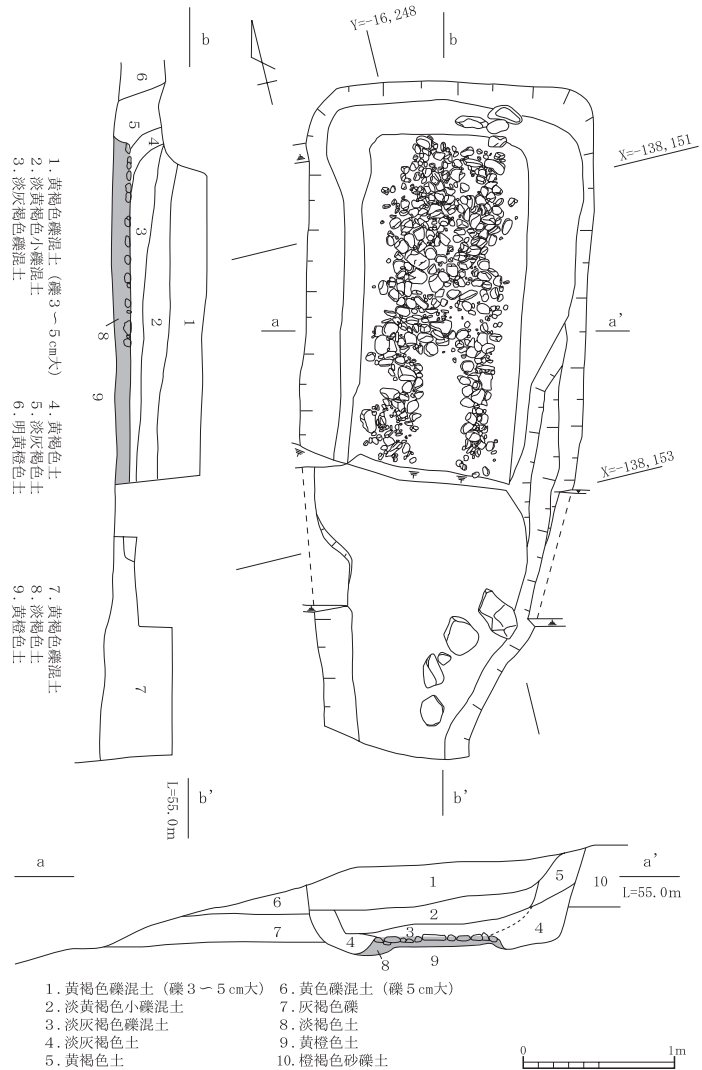


第22図 古墳2周溝遺物出土状況実測図

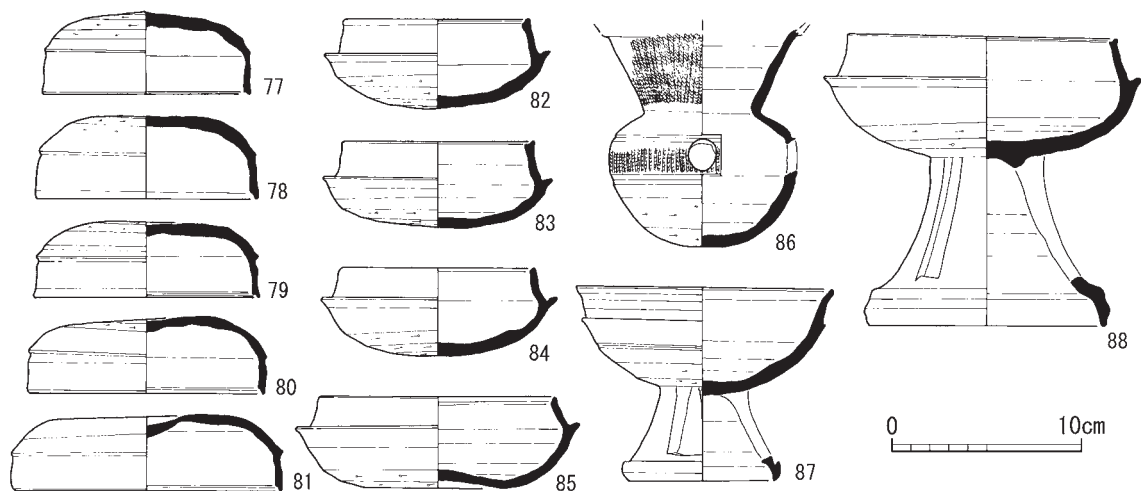
が認められない。85は口径12.35cm、器高4.9cmで、他の身より一回り大きい。口縁端部の段は不明瞭となっている。86は甗である。口縁部外面には細かい波状文を、体部には刺突文を施す。口縁端部は欠損しており、打ち欠いて使用していたようである。色調は外面が濃灰色で、断面は紫灰色である。MT15型式併行期のものである。87は短脚の高杯である。口径13.5cm、器高10.2cmである。脚部には3方向に透かしが施される。88は有蓋高杯である。口径14.2cm、器高15.4cmである。脚部には3方向の透かしが施される。蓋は出土しなかった。

(3)小結

第4次調査では、新たに古墳2基の存在が明らかになった。古墳の築造時期は古墳1が6世紀前半、古墳2が6世紀初頭であると考えられる。調査地の南東約500mにある後期の前方後円墳上狛天竺堂古墳では5世紀後半に横穴式石室が導入されており、南山城ではもっとも古いものと考えられている。今回確認した石室は、それに続く



第23図 古墳2石室実測図



第24図 第4次調査出土遺物実測図(4) 古墳2

時期のものであり、山城地域の横穴式石室導入過程を考える上で貴重な事例となる。

5. まとめ

椿井遺跡の第3・4次調査では、それぞれ大きな成果を得ることができた。

第3次調査では、これまで遺構が検出されていなかった飛鳥時代の溝や建物が見つかり、白鳳期に松尾廃寺が創建される契機となるような土地利用の状況が想定される。残念ながら奈良時代の遺物が出土しておらず、まだ推測の域は出ない。

第4次調査では、新たに古墳が2基見つかり、他にも丘陵の尾根筋に後期古墳が分布する可能性が想定される。周辺古墳群でも横穴式石室が確認されており、この地域では城陽の久津川車塚古墳群と異なり早くから新しい墓制である横穴式石室を積極的に採用した地域であることがよりいっそう明らかとなった。特に古墳1の石室は、小型で、羨道部と玄室とに段差がある竪穴系横口式石室であり、導入期の石室の一つのバリエーションであると考えられることから、南山城地域の導入期の石室の様相を考える上で貴重な資料といえよう。南山城の竪穴系横口式石室については、木津川市相楽の音乗谷古墳や同吐師の白山古墳・坊谷古墳、同加茂町の草が山1号墳、和束町の坂尻1・2号墳等の例があり、相楽郡に分布が限られているようである。平良泰久氏は、竪穴系横口式石室の分布と渡来系氏族の居住という点で相楽郡と近江の湖東地域との共通点を指摘し、和束道を通して竪穴系横口式石室が伝播したのではないかと考えている。

今年度、椿井遺跡の南西に位置する上狛北遺跡の発掘調査で、これまで木津川右岸では見つけていなかった古墳時代中期から後期の集落が見つかった。今回見つかった古墳の造墓集団の集落である可能性がある。また、碧玉製管玉は、製作技法から出雲の忌部による製作の可能性が高いと考えられ、被葬者像を考える上で興味深い資料である。

また、今回見つかった石器には1点ではあるが旧石器時代のナイフ形石器が含まれていた。南山城における旧石器の出土点数は少なく、木津川市内では本例で2例目である。縄文時代の石器についても遺構に伴うものではないが、当時の人々の生活の一端が窺える貴重な資料といえる。

(松尾史子)

参考文献

高野陽子・柴暁彦「椿井遺跡第1・2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第117冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2006

上田真一郎「Ⅰ 椿井天上山古墳第1次調査Ⅱ 松尾廃寺第1次調査山城町内遺跡発掘調査概報Ⅸ」(『京都府山城町埋蔵文化財報告書』第22集 山城町教育委員会)2000

島軒満「椿井天上山古墳-第2次調査-山城町内遺跡発掘調査概報Ⅹ」(『京都府山城町埋蔵文化財報告書』第26集 山城町教育委員会)2001

『京都府登録有形文化財(建造物)松尾神社表門修理工事報告書』松尾神社 1997

中島正「車谷古墳群」(『京都府山城町埋蔵文化財報告書』第31集 山城町教育委員会)2003

鈴木重治「山城出土の旧石器」(『考古学ジャーナル』167 ニューサイエンス社)

平良泰久「精華の古墳時代」(『精華町史本文篇』精華町)1996

内田真雄「山城の横穴式石室」(『研究集会近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会)2007

圖 版



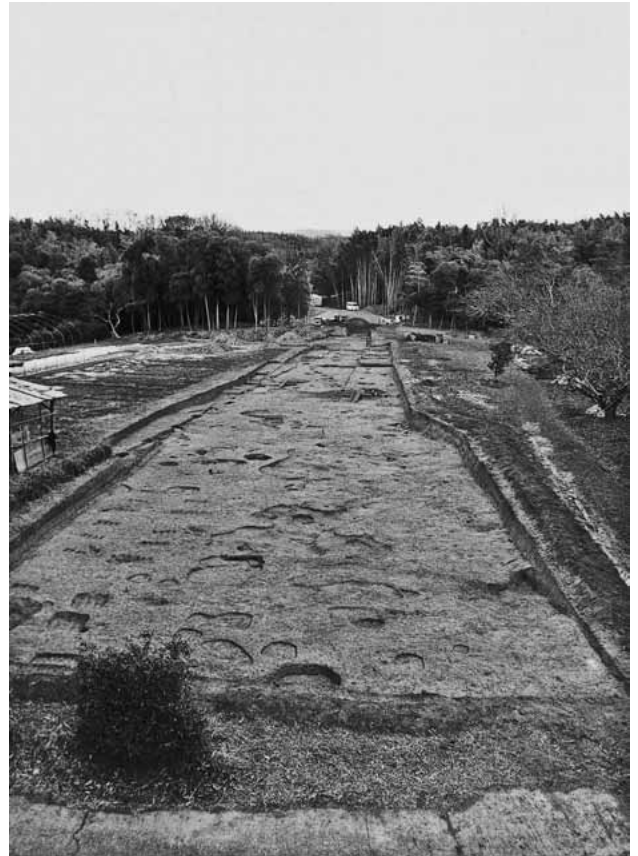
調査地近景(北東から)



(1) 調査地近景(西から：奥は松尾神社)



(2) 1 トレンチ全景(南から)



(3) 2 トレンチ全景(南から)



(1) 2トレンチ中央部(上空から)



(2) 掘立柱建物跡S B01・02(南東から)



(1) 溝 S D 49 全景 (東から)



(2) 溝 S D 49 完掘状況 (東から)



(3) 溝 S D 49 断面 1 (北から)



(4) 溝 S D 49 断面 2 (北から)



(1) 炉跡 S X 43 上層柱穴群 (北東から)



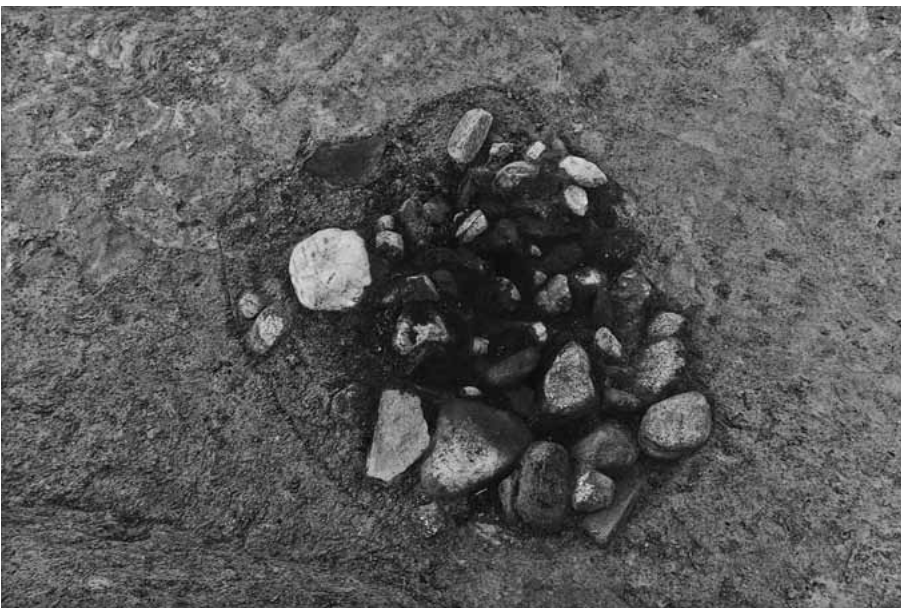
(2) 炉跡 S X 43 完掘状況 (南東から)



(1) 炉跡 S X 43上層遺物出土状況
(北西から)



(2) 炉跡 S X 43(北から)



(3) 土坑 S K 46(北東から)



(1) 3トレンチ全景(北から)



(2) 溝S D18全景(北東から)



(1) 調査地遠景(北から)



(2) 調査地遠景(南から)



(1) 1トレンチ全景(北から)



(2) 方形周溝墓状遺構 S X49
検出状況(南から)



(3) 流路 S R76全景(東から)



(1) 土坑 S K53 遺物出土状況
(北東から)



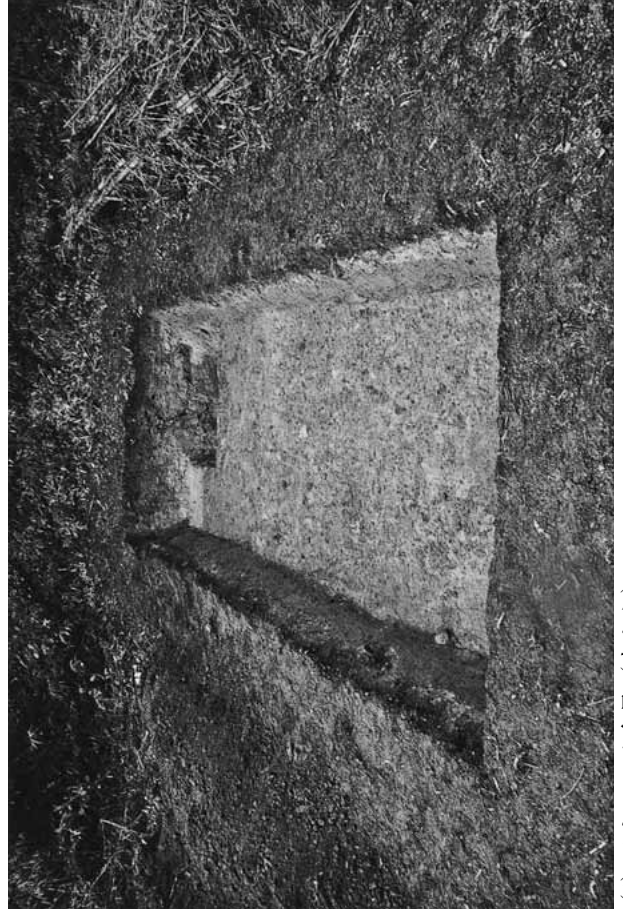
(2) 土坑 S K55 遺物出土状況
(西から)



(3) 溝 S D80 遺物出土状況
(南東から)



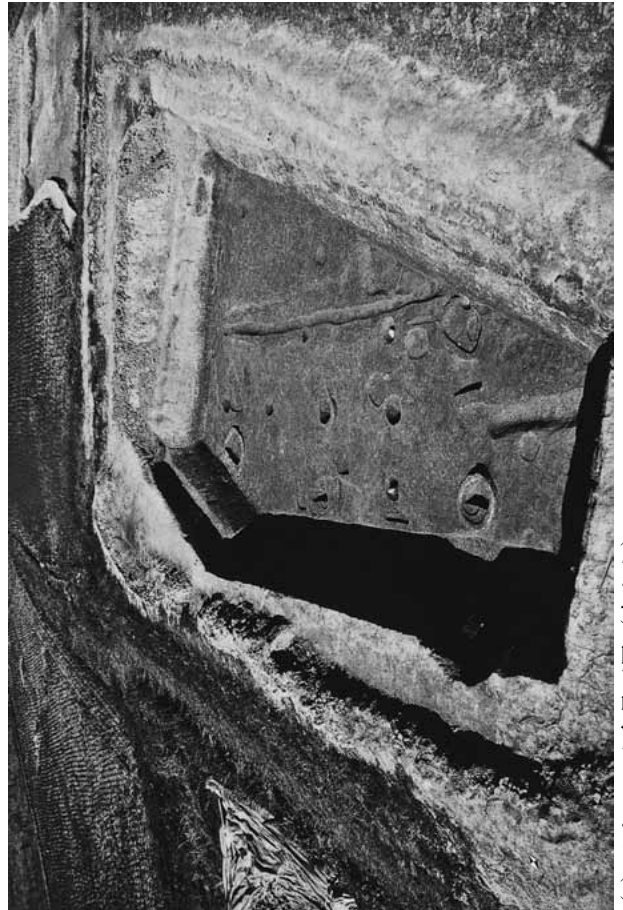
(3) 3トレンチ全景 (北から)



(4) 4トレンチ全景 (南から)



(1) 2トレンチ全景上層 (南から)



(2) 2トレンチ全景下層 (南から)



(1) 5トレンチ全景(西から)



(2) 古墳1全景(西から)



(1)古墳1 石室検出状況(南東から)



(2)古墳1 石室全景(南東から)



(3)古墳1 石室完掘状況(南東から)



(1) 古墳1 鉄鍬出土状況(南から)



(3) 古墳1 刀子出土状況(南から)



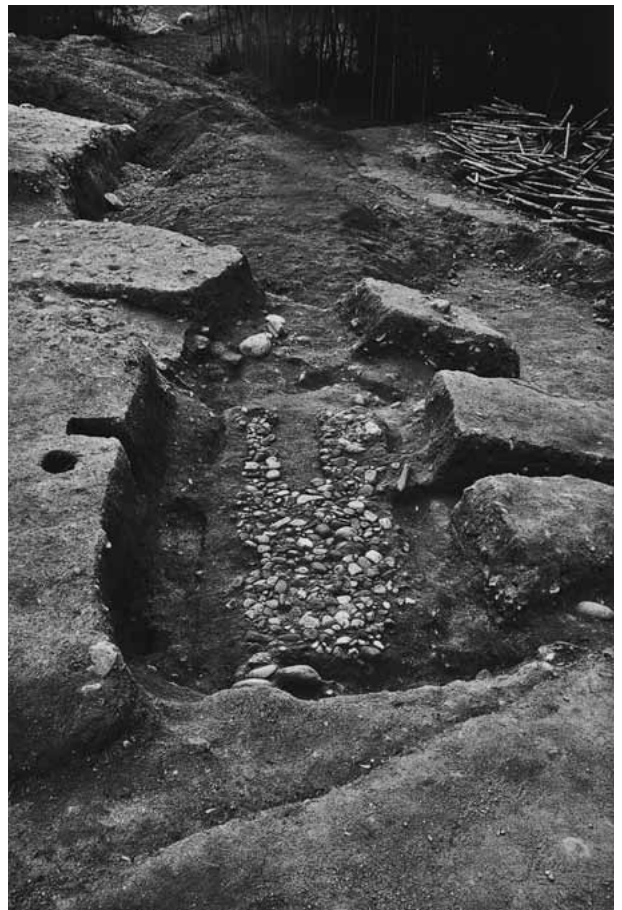
(2) 古墳1 須恵器出土状況(西から)



(1) 古墳2 全景(北東から)



(2) 古墳2 石室全景(南から)



(3) 古墳2 石室全景(北から)



(1) 古墳2 石室完掘状況(北から)

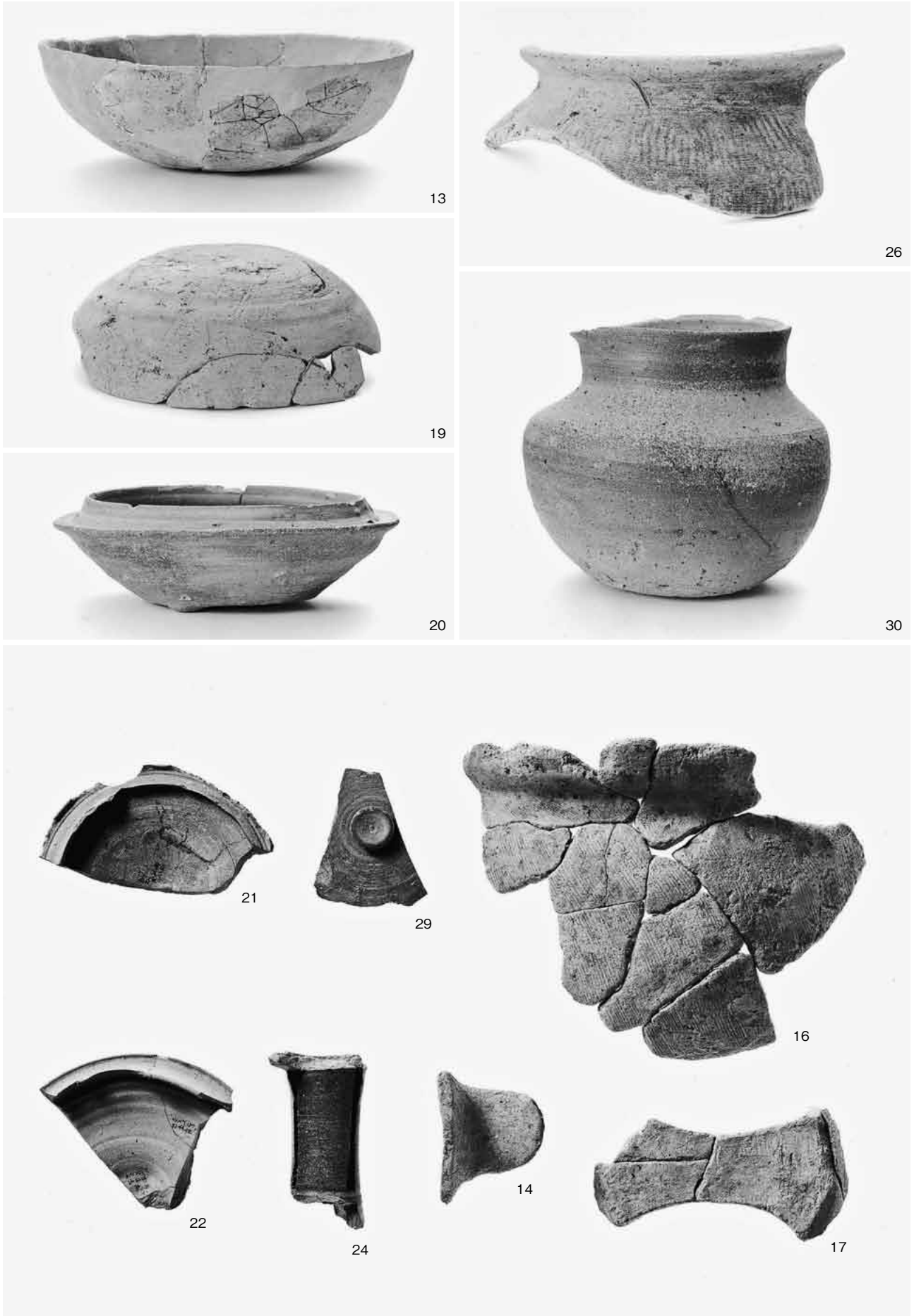


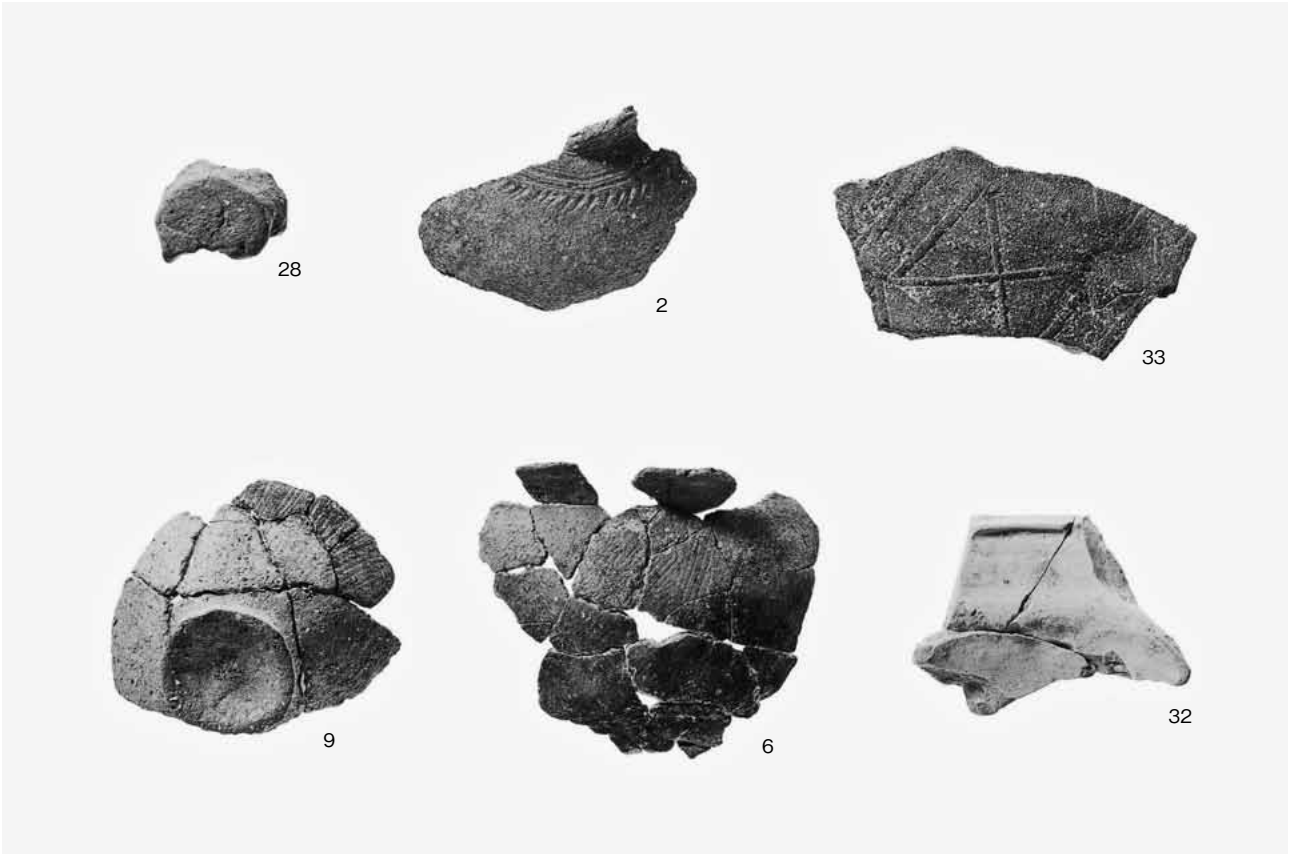
(2) 古墳2 周溝遺物出土状況
(南から)



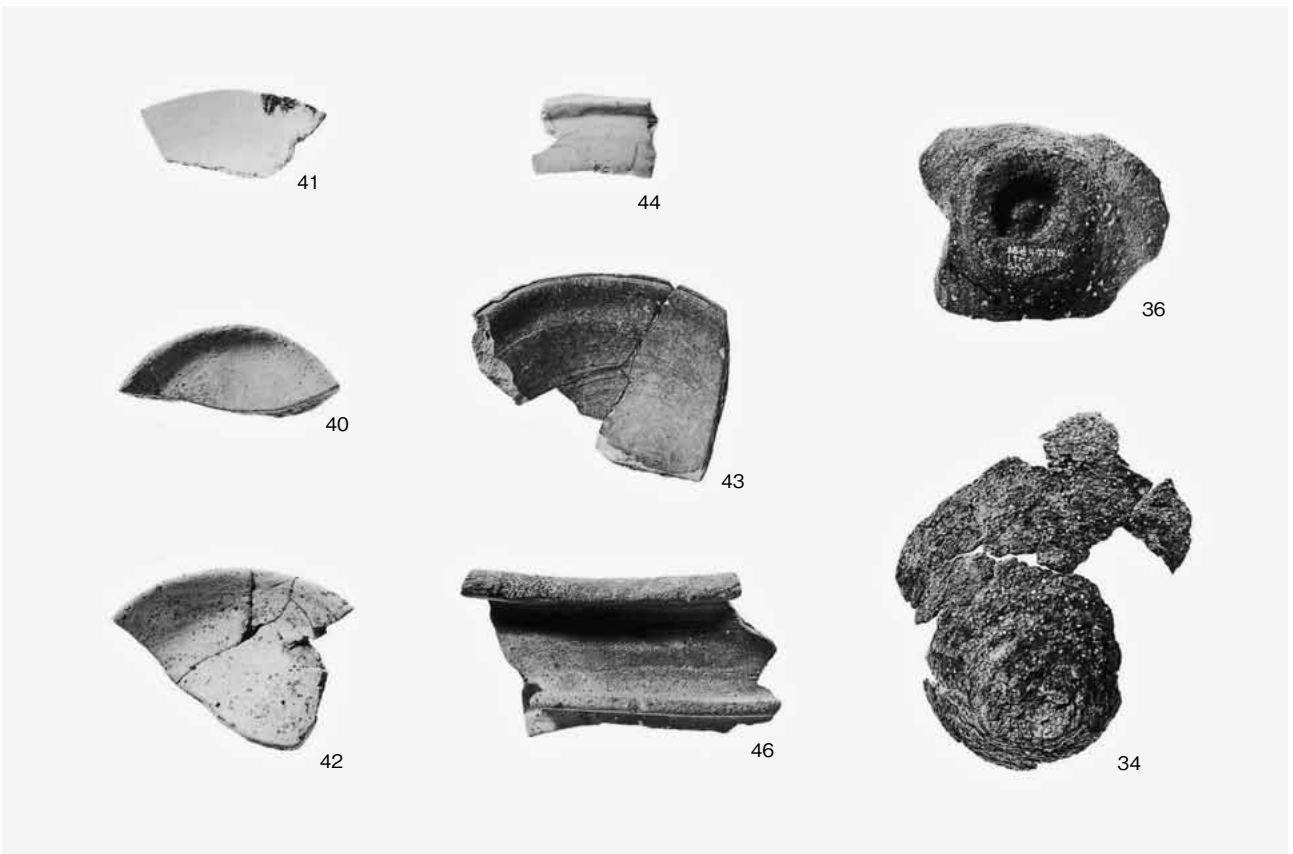
(3) 古墳2 周溝断面(南から)



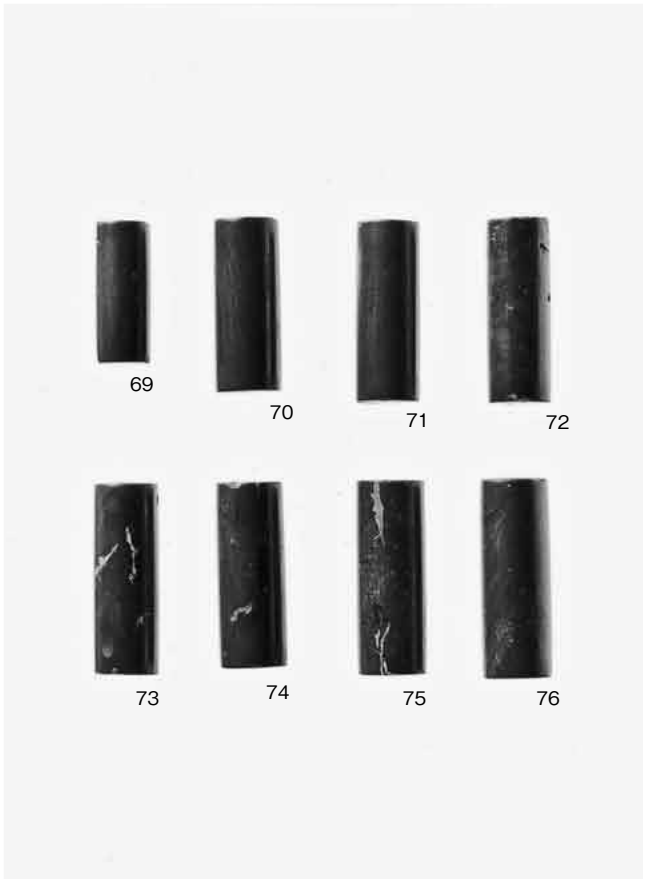
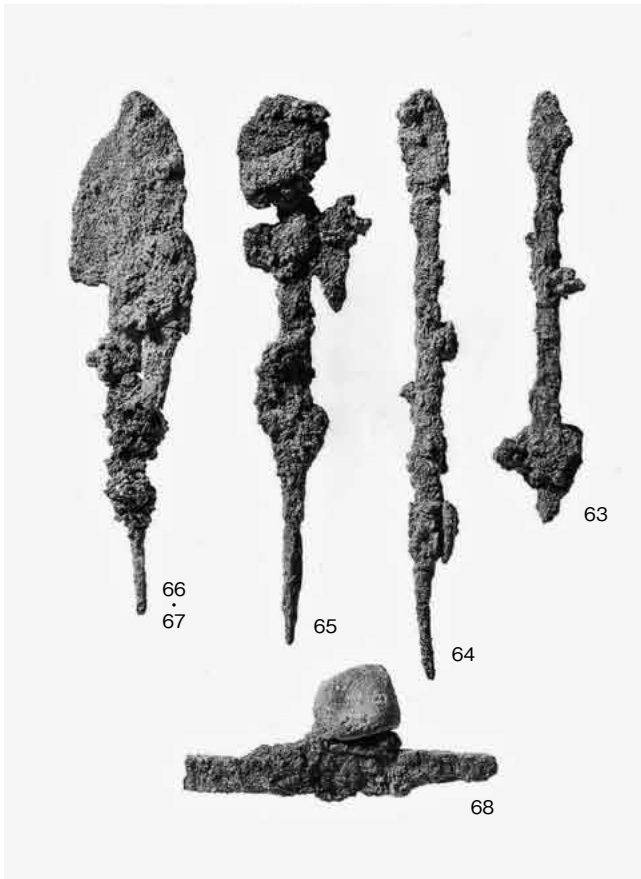




(1) 第3次調査出土遺物 3



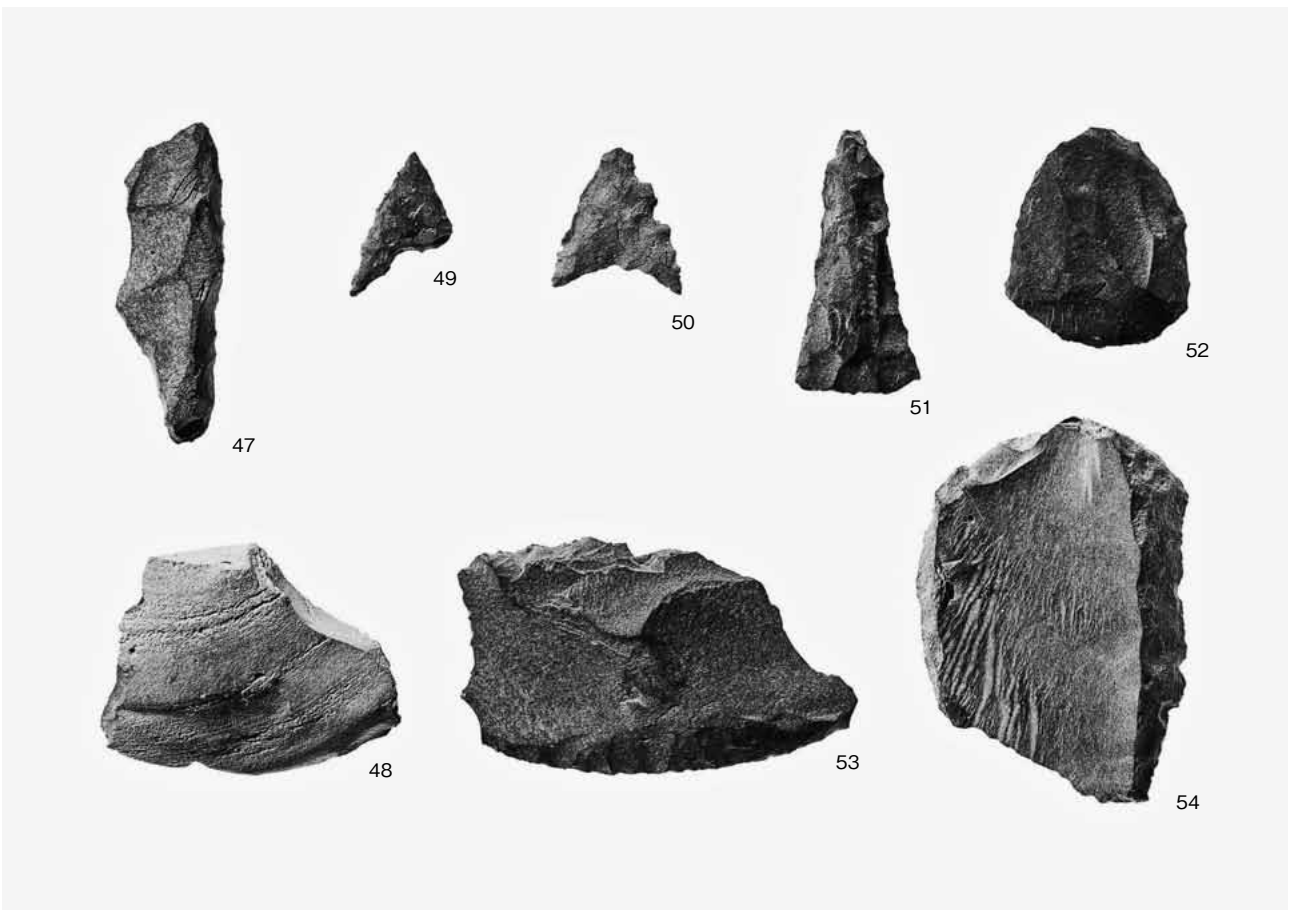
(2) 第4次調査出土遺物 1







(1) 第4次調査出土遺物 4



(2) 第4次調査出土遺物 5